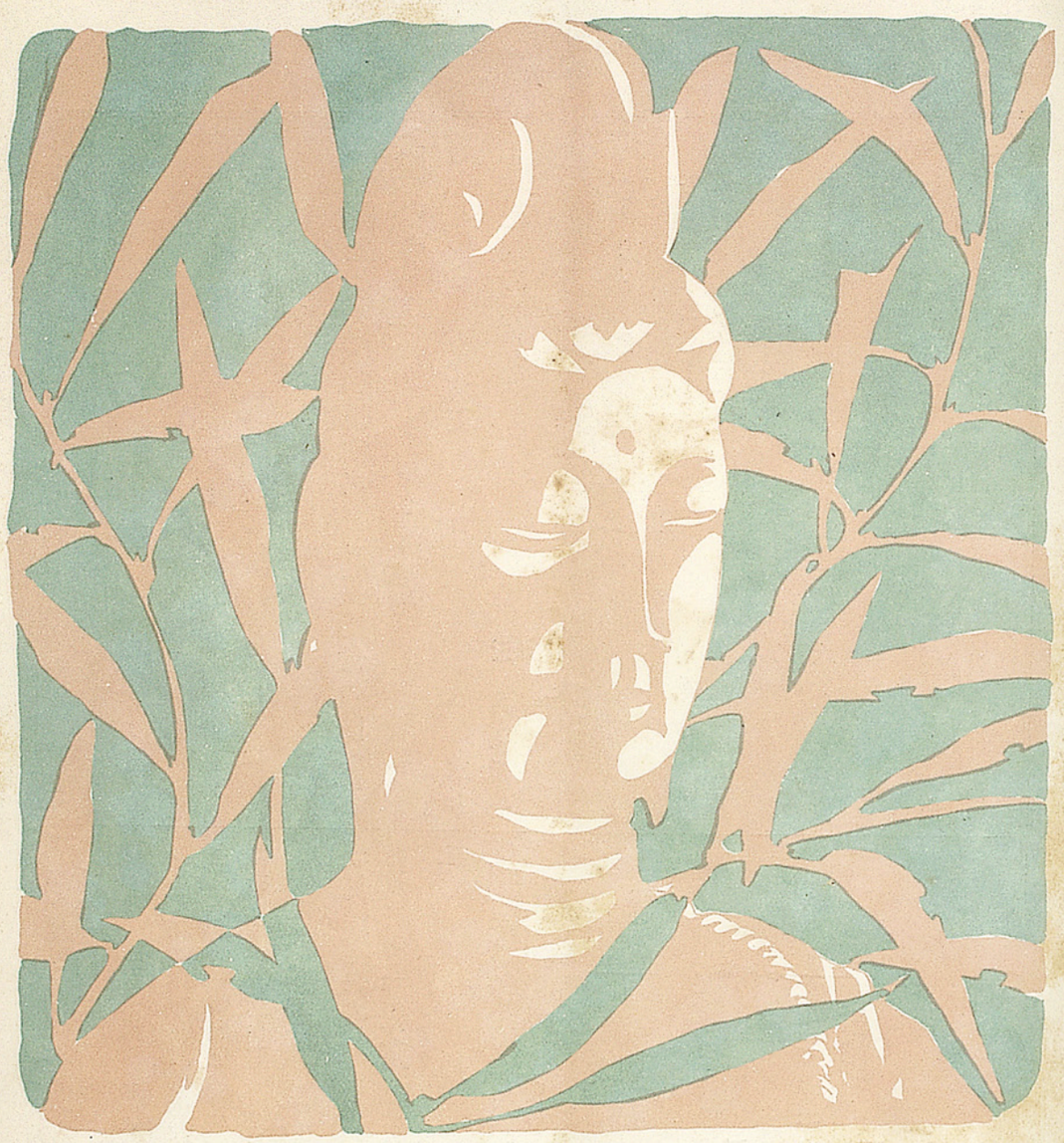

求道

第五號　第參卷

明治卅九年六月一日發行（每月一回一日發行）

明治卅一年十二月廿六日　第三種郵便物認可

求道第參卷第五號目次

◎德號の慈父、光明の悲母　求道
◎招喚の勅命　感謝
◎瓦礫金と變ず◎歸依佛◎息災延命◎降魔驅鬼◎心光攝護　講話　近角常觀
◎罪惡觀の心相　聖傳
◎ヂヤータカ釋尊傳――成道　告白
◎佛陀廣大の慈悲　講義　忠作次
◎歎異鈔――第壹章　嘆咏　近角常觀
◎讃唱謌《短歌》　左千夫
◎いなゝき《同上》　八風
◎暮れ行く日《長詩》　紹介　甲之
◎十萬白龍◎眞宗假名聖敎◎眞宗寶典◎眞宗聖訓◎親鸞聖人全集◎新約物語◎三の王冠◎金髮王女◎感化術◎宇宙の默示◎和漢英對譯法句經　時報
◎求道學舍紀念日◎島田蓉根翁延壽會◎夏期講習會◎求道學舍第一、第二、求道學舍講話題

講話

毎日曜午前八時
（但七月第一、二、三、日曜ニ限リ休講）
求道學舍
（本郷森川町一番地）

毎土曜午後二時
（但七月第一、二、三、土曜ニ限リ休講）
第一求道會
（九段坂佛敎倶樂部）

毎月二日午後七時
（但七月ニ限リ休講）
第三求道會
（日本橋蠣殼町説敎所）

求道

第參卷
第五號

德號の慈父
光明の悲母

南無阿彌陀佛は大慈の親の尊き御名である、盡十方無礙の光明は大悲の親の暖き惠みである、人生れて口を動かすに至るや先つ呼び出すは父よ母よの呼聲である、是無意義のことではない、知らず識らずの間に親の慈愛念力が貫徹するからである、吾人が一念南無阿彌陀佛と御親を慕ひ奉る稱名の出づるは、よく〳〵大慈佛陀の念力の御催に與るからである。

嗚呼尊き哉、南無阿彌陀佛の御名、印度を淵源として中央亞細亞、西藏、蒙古、支那、朝鮮を經て我が日本に至り南方亞細亞より輓近歐洲に及ぶまで名聲十方に聞こえざることなし、時に古今あり、所に東西あり、國に興亡あり、民に文野あり、人種に異同あり、敎に隆替あり、人に賢愚ありと雖、如何に多くの人々が此尊き御名を味ひたてまつりて心を安んじ奉るかな、人平素事なきときは名號を稱ふることの、あまりに質撲なるがために口訥り、年少青春の人はうら恥かしさが如き感をなせども、一旦眞面目なる境に臨みては一心專念此名號を稱へざる人はなからふ、病危篤に瀕するときは、如何なる小供も老翁も野人も學者も唯念佛である、日露戰爭中に於て宗敎信念が如何に發動しつゝあつたかは詳かにはせざれども、萬人口に南無阿彌陀佛を稱へつゝ瞑したることは疑を容れぬ所である、宗敎は衰へても、僧侶は腐敗しても、南無阿彌陀佛は衰へもせぬ、腐敗もせぬ、釋尊成道して未だ一人の僧侶の出來ぬ時、既に南無佛南無法の二歸を生じてある、和國の敎主聖德皇は口を開きて先づ南無佛を稱へられた、未だ淨土門の一宗として起らざる前、既に業に念佛往生の人々の多かりしは爭はれぬ事實である、嗚呼如何に尊き佛の御名なるかな、かくの如く億々の衆生一齊に御親を呼び慕ひまゐらする所以のもの是本願招喚の勅命あるが爲ならずや。

此御名は如何なる意義を有するか、此御名によりて呼びあらはさるゝ佛陀夫自身は如何なる方であるか、言ふまでもなく、阿彌陀佛は無量光、無碍光である、即盡十方無碍の光である、何物にも障碍なき光明である、即ち吾人の內心の無明煩惱を照して碍ふるところなく、悉く闇を破りたまふのであ

る、啻に其闇を破るのみならず、明到らざるところなく、無碍自在にして諸の志願を滿足せらるゝ惠みである、即ち佛の御惠みの中に包まれたるありさまである、これがすなはち佛陀夫自身の眞面目にして御名の中に含まれたる意義である、和讃に『十方微塵世界の、念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたてまつる』とあるは此眞髓をあらはされたものである。

かくの如き美はしき名に、かくの如き美はしき意義を含ませて佛陀は之を我等に與へたまふのである、吾人は此貴き佛名を稱ふるときに知らず識らずの間に大慈大悲の御心は我等の心中に宿り來るのである、而して此大慈大悲の御心は遠き十劫の古より常に我等苦惱の衆生を憐みたまひて、常に照し、常に養ひたまひし光明である、かく大慈大悲の光明にて照し、大慈大悲の御名を與へて我等が胸に大慈大悲の御心を仰ぎたてまつる心を起さしめたまふのである、これすなはち大悲回向の信心である、してみれば我等が信仰なるものは一點も我等の力は雜らぬ、皆是如來の御力である、此の如く名號は力强き慈父である光明は惠み深き慈母である、此父の敎と母の育てによりて初めて大慈大悲を仰ぎ奉る信心を起さしめ下さつた。

一たび大慈大悲の父母を知らして下さつた已上は之を忘れやうと思ふても忘るゝことは出來ぬ、無きものを有るが如くに想像して居るならば、一時之を思ふても忽に消え失せる、されどかくの如き大慈大悲の親がありながら今まで知らずして背きしこそ不覺なれ、一たび此御親の在すことを知りた已上は金剛堅固の信心である、況んや其親は益々敎へ導き、益々養ひ育てゝ下さるのである、いよ〳〵親を認めてより呼びたてまつる御名は猶貴く、知らず識らずの間に攝取の心光は常に照護して倦みたまはぬのである、我等親の御恩を知らざりしものに遂に之を知らしめたまひしのみならず、知りたるものに猶光明名號の父母は外より護り導きたまふのである、かくて此人生を終りて盡十方無碍の光明に一味にして大慈大悲に面接したてまつる次第である、これが極樂無爲涅槃界である、無量光明土の眞身である、何とも形容しがたき御慈悲である、『行卷』に於ける聖人の釋文を味ひ奉るに、實に味ひ盡されぬ味が溢れてある。曰く、

良に知ぬ德號の慈父ましまさずば能生の因闕けなん、光明の慈母ましまさずば所生の緣乖きなん、能所因緣和合すべ

しと雖、信心の業識に非んば光明土に到ることなし、眞實信の業識斯れ則ち內因となす、光明名の父母、斯れ則ち外緣と爲す、內外因緣和合して報土の眞身を得證す。

かくの如く大慈大悲の父母を認めて光を仰ぎ、名號を稱へつゝある春風和樂の生活は洵に美しき極である、人生百年光悠悠の眞光景である、聖人は又此の如く書きたまひてある

大悲の願船に乘じて光明の廣海に浮びぬれば至德の風靜かに、衆禍の波轉ず、即ち無明の闇を破り、速に無量光明土に到りて、大般涅槃を證し、普賢の德に遵ふ也と

眞に是れ信仰生活の究極を示されたるものである、嗚呼美はしき生活なる哉、かの皆の人の讃嘆措かざる和讃に『大願海のうちには、智愚の波こそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり』といへるも同意味である。

善導獨明佛正意。矜哀定散與逆惡。
光明名號顯因緣。開入本願大智海。
行者正受金剛心。慶喜一念相應後。
與韋提等獲三忍。即證法性之常樂。

招喚之勅命

近時世人が人生問題の解決に苦しみつゝあるは世に眞の同情者を見出すことの出來ぬからである、諸の事件に觸れて人々が人生の上に缺陷を感じつゝある、そして何れも之を滿足せんことを希望しつゝあるのである、しかるに此人生の立場を標準として滿足を求むるときは永久十分なるときはなかろう、たとひ信仰を求むるも、佛陀を念ずるも、自己の立場を覆へさずして徒らに他に求むるとも夫は得られぬのである。

然らば如何にして得らるゝかと云へは既に佛陀の方より吾人に向て同情を注ぎ、招喚したまひつゝあるのである、抑々吾人人生の立場が誤りである、迷である、而して既に迷を出てたまひたる大覺佛陀が迷へる吾人の上に大慈大悲の救濟の呼聲を垂れたまひつゝあるのである、而して吾人は此聲に呼びさまされて其親を認め、其呼聲に應じたのが吾人の信仰である、すなはち吾人人生に於て同情を見出すことが出來ぬときに佛陀は正に其人生に對する同情慈愛の招喚の聲である。

既に此の如き同情の招喚の勅命あるをさかば何人か心を安んぜずして止み得べき、是れ正に吾人が人生に於ける唯一の

生命である、而して是れ信仰問題の樞機である、何人も道を求め信仰を求め佛を求むるまではゆけるが、之を求め之を呼び、之を叫びて聲絶えんとするに至るも得られぬといふ歎聲をきくことである、然るに聖人は佛陀は既に業に吾人苦惱の衆生に對して大悲招喚の聲を下されてあると示したまひた、故に南無阿彌陀佛は先づ吾人より佛陀に向て求むる聲にあらずして先づ佛陀より吾人を呼びたまふ聲である、歸命といふは本願招喚之勅命也といへるは此要點を示したまへる御言である、而して吾人が口に稱ふる念佛なるものは此招喚の勅命に應ずる叫である。

吾人は確信す、現代時勢の要求は此の如き大慈招喚の聲を聞くことによりて滿足さるゝ、否滿足さるべき御救は古より既に眼前にあつたのである、即ち南無阿彌陀佛の招喚の聲である、最も新しき問題は最も古き問題である、人類は進足しても人間は變らぬ、社會は變遷しても人生は同一である、此人間の問題、人生の問題は千古同一の佛陀の力、即ち念佛の一より外に解決の道はない、近時種々の動機によりて道を求むるの叫か切實に響くにつけて早く大慈招喚の聲あることを知らしたいと思ふ。

全體世人は新らしきことのみに注意して、我手に寶のあることに氣がつかぬは歎はしい、殊に聖人の釋文の如き如何にも剴切なる信仰の味である、口に佛名を稱ふるは珠玉を吐くが如し、古來念佛を摩尼寶珠に譬ふるは洵に尤なることである、眞に念佛は一代佛教を結晶せしめたる眞珠である、大慈父威神の尊號である、大悲母慈愛の光明である、如來招喚の靈勅である、久しからぬ間に新たなる實驗を經て、此神聖なる御名の十方に響くことを吾人は預言するものである。

五劫思惟之攝受。　重誓名聲聞十方。
普放無量無邊光。　無碍無對光炎王。
清淨歡喜智慧光。　不斷難思無稱光。
超日月光照塵刹。　一切群生蒙光照。

感謝

瓦礫金と變ず

聖人慈愍三藏の釋文を和譯して信仰の力を讃じたまふ、簡潔にして力ある此の如き眞に佛力の示現なり、曰く

多聞淨戒えらばれず、　破戒罪業さらはれず、
たゞよく念ずるひとのみぞ、瓦礫も金と變じける。

素樸一點の修飾を施したまはずといへども文字亦其信仰の金剛なるが如し、たゞよく念ずるひとのみぞ瓦礫も金と變じける、嗚呼貴き如來の慈悲なる哉、嗚呼無碍光明の力なる哉。

歸依佛

信仰は夫自身目的也。夫自身究極也、若し信仰を手段として他の結果を得んと欲するあらば是れ不可也、『念佛はまことに淨土に生るゝ業にてや待るらん又地獄に落つる業にてや侍るらん總してもて存知せざる也、』既に淨土に生るゝ爲に念佛するすら猶不可也、況んや此念佛によりて現世の富貴を得んとし、人生の幸福を希望するが如き關じて不可也、是れ聖人が現世祈禱を嚴禁したまひたる所以也、吾人は唯々佛を信し、佛に歸命するの外なき也、既に佛を信し佛に歸命するもの心中他の信仰を容れ、他に希望を有するの餘地あらんや、聖人の信仰は佛教本來の眞面目を發揮したまへる也、聖人自ら『化卷』に曰く、

涅槃經に言く、佛に歸依せんものは更に其餘の天神に歸依せざれ。

般舟三昧經に言く優婆夷是三昧を聞きて學ばんと欲せんものは自ら佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ、餘道に事ふることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を祠ることを得ざれ、吉良日を視ることを得ざれ。

又言く優婆夷三昧を學はんと欲せば、天を拜し神を祠ることを得ざれ。

嗚呼佛を信ずるものは唯南無佛の一あるのみ、生必しも喜ぶに足らず、死必しも憂ふべからず、況んや此念佛によりて結果を豫想し、眼中他の目的を挾まむをや、唯何事も佛陀の御計ひを仰ぎて念佛讃嘆の一あるのみ。

息災延命

佛は是れ無量壽也、無量光也、吾人佛を念するとき佛力自然に我に加はる、期せずして幸來り、祈らざるに禍退く、此に於てや死すべきの人死を免れ、刑せらるべきの人釋然として解脱を得、是れ佛陀威力の活現なるもの、一點人間の計ひを抑むべからざる也、聖人嘗て南都僧徒の讒訴によりて一旦死罪に坐せられんとしたまへり、忽ちにして流謫に處せられたまふ、聖人一言之につきて述べたまはず、人亦之に言ひ及ばず、されど聖人の和讃には無意識に之を說破したまへり、曰く

阿彌陀如來來化して　息災延命のためにとて
金光明の壽量品　ときおきたまへるみのりなり。
南無阿彌陀佛をとなふれば　この世の利益さはもなし
流轉輪廻のつみきへて　定業中夭のぞこりぬ。
山家の傳敎大師は　國土人民をあはれみて
七難消滅の誦文には　南無阿彌陀佛をとなふべし。
一切の功德にすぐれたる　南無阿彌陀佛をとなふれば
三世の重障みなながら　かならず轉じて輕微なり。

嗚呼力强き文字なる哉、死必しも惡しきにはあらず、西意善綽、性願、住蓮、安樂の死罪、猶念佛を壓し信仰を奪ふ能はざりしを見れば、死は却て信力の强盛を示したまふことあり、必しも人間の見地を以て現世の延命長壽をのみ可なりとせんや、死を免るゝも佛意なり、流謫に處せらるゝも佛意なり、看よ師弟聖人の流謫は却て邊鄙の群類を敎化したまふべき佛意の下りしもの、何れも喜びて配所に就きたまへり、嗚呼此時聖人死に坐せられたまひなば吾人何ぞ聖人心血の聖敎を拜したてまつるを得べき、亦此の時聖人流謫に處せられたまはざりせば吾人亦何ぞ聖人心血の御聖敎を拜したてまつるを得べき、嗚呼何ぞ佛天の御計ひの甚深廣遠なる、吾人は唯如來の御計ひを仰きて一點私の計ひを抑むべからざる也。

降魔驅鬼

人惡魔に魅せられ、妖鬼に禍せらるゝこともあり、而して信仰の力能く惡魔妖鬼を驅逐して其害を免れしむと、是亦自然の結果期せずして此に至れるもの、詳かに信仰內的の實況を察するに益々信仰の威神力の大なるに感ぜずんばあるべからず、蓋し內心煩惱に充ち迷妄に陷るときは遂に强迫觀念に

苦しめられ、目に惡魔を見、耳に惡聲を聞くに至る、而して內心一たび佛陀無限の大悲に融和して無碍の光明に照さるゝときは迷想忽ち退きて妖魔其影を滅するに至る。古來信仰の能く惡魔を驅逐すといふもの寧ろ怪むに足らざる也。眞個に是れ無碍の一道なる者。和讃に曰く、

天神地祇はことゝく　善鬼神となづけたり
これらの善神みなともに　念佛のひとをまもるなり。
願力不思議の信心は　大菩提心なりければ
天地にみてる惡鬼神　みなことゝくれそるなり。

嗚呼奇蹟疑ふべからず、佛智洵に測り難し、近時動もすれば錯覺幻覺の宗敎的經驗と混し安きを憂ふるものあり、眞個の絕對的信仰の經驗は却て此の如く錯覺幻覺を退くるもの、無碍の光耀は內界外界何物も障碍すること能はざる也。

心光攝護

吾人一たび無碍の光明に照されぬれば冥々の間、靈界の諸聖其光明の中に出現したまひて護念したまふの光景まことに言語の及ぶ所にあらず、而して一一稱へ出す念佛は一一是れ無數の佛菩薩を化現して法界森森として星宿の燦然たるが如し、和讃に曰く

南無阿彌陀佛をとなふれば　觀音勢至はもろともに
恒沙塵數の菩薩と　かけのごとくに身にそへり。
無碍光佛のひかりには　無數の阿彌陀ましゝて
化佛をの〳〵ことゝくく　眞實信心をまもるなり。
南無阿彌陀佛をとなふれは　十方無量の諸佛は
百重千重圍繞して　よろこびまもりたまふなり。

聖人のたまはく節すでに入句にせまれり、なほ帝畿にありともながくいきて誰かみん、たゞし因緣つきずばなんぞまた今生の再會なからん、驛路は是れ聖者のゆく處なり庶家には一行阿闍梨、和國には役優婆塞、隣所はまた權化の住砌なり、靈旦には白樂天、吾朝には菅丞相、上古の英聖猶然なり、況や末世の愚癡をや、先蹤々〻にあり、耻とするにたらず、恐とするにおよばず、此時にあたりて邊鄙の群衆を化せんこと莫大の利生なり、但痛ところは源空興する淨土の法門は濁世衆生の決定出離の要道なるがゆへに守護の天帝定て冥厭をいたさんか、もしゝからば貧道が流罪弟子（住蓮安樂）の斬刑かくのごときの事前代未聞こと當篇に絕たり、因果のむなしからざることいきて世に住せばおもひあはすべきなりと云云、聖人またのたまはく、我たとひ死刑に行はるとも更に變ず可らず云云其氣色もとも熾盛なり見たてまつる諸人涙をなかし歡喜せずといふ事なし後に信空上人のいはく先師のことは相違せず、はたしてその報あり、如何となれば承久の騷亂に東夷上都を靜謐せしとき君は北海の島のなかにまし〳〵て多年こゝろをいたましめ、臣は東土の道の邊にして一時に命を失ふ、先冒たがはず後生よろしくきくべしと云云。

（拾遺古德傳）

講話

罪惡觀の心相

（求道學舍日曜講話）

近角常觀

今日の題は『罪惡觀の心相』と出して置きました。言葉がどうも充分でありませぬ。信仰上の罪惡觀の味ひと申しませうか、罪惡觀の眞の心持をば今日はお話して見度いと思ひます。

近頃信仰上の問題が盛に起つて來たに就きまして、諸君が熱心に道をお求め下さるのは實に喜ばしく思ひます。偖て夫に就て信仰上の自覺といふ上に於て、現代の信仰中最も欠けて居ると言はうか、一番充分て無いのは罪惡觀が深く感ぜられて居無い點てある。自分が罪惡なりといふ大覺悟の足り無い事が現今の信仰問題の最も不充分なる點かと考へます。罪惡觀が極はまらず、罪惡觀が深く無く、罪惡觀の根底が成り立つて居無い時は、どうしても信仰が浮ひて來る。眞實の信仰は何故根底が堅いかと言へば、此の罪惡觀が強ければ強き程信仰も亦堅く成つて來るのてあります。

偖て其罪惡觀とはどうかと言ふに、罪惡觀と謂つて何も特に觀の字に力を入れて言ふ譯ては無い。通常世間では自分の罪惡を深く感じ、自分が悪い、自分が可け無いと、苦しみ歎き煩悶する狀態、之を稱して罪惡觀と言つて居る。併しながら之は成程眞に罪惡を觀ずる道行てあり道筋たるには達はぬが、去りながら自分で苦しみ悶ゑて居る間は未だ眞實に自分は罪惡の者なりと思ひ切れたと言ふ事が出來ぬのてある。故に此時に於ては口ては此の世が苦しい、思ふ樣にゆかぬ、罪が深いと言つて居るが、心ては尙ほ何うかして自分で安心に成り度い、斯くも仕度い、かうも爲ねばならぬといふ心持を密に抱いて居る。夫れて此の狀態に居る時は、設ひ罪惡觀と言つても、恰も絶壁を蹈み誤つた人が自分は今落ちて行く、今落ちると思ひながらも尙ほ岩角に捕まつて何うかして這ひ上ぼらんと力み躁く有樣てす。今日多くの人が信仰問題て苦しんて居られるのを見るに、或ば人生が思ふ樣にならぬ、力が及ば無いと如何にも痛切に罪惡觀無常觀を感じて居られるやうてあるが、併し其底には猶ほ自分で何んとか遣りてゆけるといふ考が殘つて居るやうてある。夫てあるから動もすれば、自分も悪いが人も悪いと、自分のみならず自分と同じく人をも悪く苦しく思へたりする事に成つて來るのてす。此の狀態をば世人は罪惡觀と稱して居るのてあるが、決してさうは言へぬ、之ては未だ眞の罪惡觀には至れて居ないのてある。

猶ほ進んて申せば罪惡觀計りがさうてなく無常觀に就いても同じてす。全體罪惡觀と無常觀とは常に並べて言ふのてあるが、此の二つ決して別の者て無い。世は無常てある、頼みにならぬといふが無常觀てある。勿論世は無常じやと思ふても夫に苦しんてる間はまだ此無常の世界を何とかして頼みにしようと思ふて居るのてある、世界は無常なりと覺悟てきたの

が無常觀てある。而して此の無常觀と自分は罪が深いといふ罪惡觀と之は決して離れたものては無く、共に人生上に關連する一つのものなのてある。之を普通に離れたものゝ如くに考へて居るのは大なる誤りてす。無常觀が起れば罪惡觀も起り、罪惡觀が起れば從て無常觀も起る事に成て來るのてす。

猶ほ申して見れば、我々はお互に今日斯くの如く身が健全てあるから、今死ぬとは誰も思うて居無い。併し乍ら實際人生を切り詰めて見れば實に何時死ぬか知れぬ生命てある、親鸞聖人は彌陀御出家をなさらうとする時「明日ありと思ふこゝろの仇櫻夜半に嵐のふかぬものかは」。といふ古歌を引きて明日迄が待ち切れぬと御急ぎなされた、人生の眞相は實に茲にあるのてす。我々は日常人世の事に氣を取られて居るから別段に無常を感ぜずに居る、けれども何事も前世の宿業てあれば何時死の業が現はれて死ぬかも知れぬ、誠に墓なき生命を抱えて居るのてあります。偖て自分は何時死ぬかも知れぬとなると、我々の今日迄の生活が甚だ不安てある、我々の思ふ事行ふ事に於て何か一として善き事が有るか自ら信じ得る事が有るかと言ふに一も無い、今日迄爲し來つた事凡て皆罪惡てある。平生五分々々て膝を接して人と話して居る時は左程にも思はぬが、斯く一念自己の無常に氣が着けば最早や他人の事杯は消えて仕舞ふ、所謂「獨生獨死獨去獨來」てあります。大經には

大命將に終はらんとす。悔懼交々至る。豫め善を修せず、窮まるに臨みて方に悔ゆ。之を後に悔ゆるに將に何ぞ及ばんや。天地の間、五道分明なり。恢廓窈窕として浩々茫々たり。善惡報應じ、禍福相承けて、身自ら之を當く。誰も代はる者無し、數の自然也。其所に應ひて、殃咎命を追ひて縱捨を得る事無し。善人は善を行じて樂より樂に入り、明より明に入る。惡人は惡を行じて苦より苦に入り、冥より冥に入る。誰か能く知る者ぞ、獨り佛知し召すのみ。

とある。如何にも適切なる御誡めてあります。實際生死の問題より云ふ時は他人の事が何うだ抔と思うて居るのは未だ餘裕のある話てある。自分の生命が何時か知れぬと切り詰めて考へた時は何人ても自己の罪惡を感ぜざるを得ぬ。罪惡觀と無常觀とは決して相離れたものて無く全く相伴へる者てあります。亦罪惡觀の方から言つても、人を恨み人を悪しく思ふたりして居る間は、未だ眞面目て無い、自分は實に悪人てある、自分の如き極重悪人は此後如何になるかといふに至りて極所に達するのてある、而して斯くなれば最早や無常觀と離れては居無いのてあります。要するに罪惡觀も無常觀も共に人生の實際の姿てある、人生の結局は何うしても生死流轉てす。生死流轉と言つても、我々が生れた時に生れ、死ぬ時に死ぬのては無い、時々刻々が生死流轉てある。而して我々は其時々刻々罪を作りつゝ有るのてす。罪惡生死無常、如何にするも我々は之を離るゝ事は出來ぬ。而も我々今日初めて斯く有るのては無く、久遠の昔より然り、現今亦斯く有るのてあります。處て此點に一念氣が着いて、我は今日現今眞に罪惡の人てある、無常の人てある、亦我は到底罪惡生死を離れる事の出來ぬ者てあると、根底より頭が下がりて覺悟の出來た時

が眞實の罪惡觀であります。

偖て今日は諸種の問題よりお話する積りて此の題を出したのであるが、先づ何より始めに申し度きは親鸞聖人の信仰であります。泝りて申せば善導大師の信仰であります。之は詳はしく申ても宜敷いが、凡て親鸞聖人が信仰の狀態をば最も力强く描かれてある處は、全く善導大師の狀態が直ぐ其儘聖人の信仰に成りて顯はれて居るのであります。親鸞聖人の信仰は『敎行信證』の樞軸たる『信の卷』に於て充分に現はれてある、而して其『信の卷』の要點は善導大師の『散善義』に現はれたる處を直に御引用なされた處であります。其の善導大師の信仰は觀經の三心釋——御承知の通り觀經には至誠心深心廻向心の三心がある。此の三心を釋せられた中深心の御釋に於て最も能く顯はれてある。即ち親鸞聖人は此の文をば其儘『信の卷』の三信釋の下に御引用なされてあるのです。平生口癖の樣に言ふて居る御文であるが、其味が實に難有い、夫は斯うであります。

二には深心、深心といふは即ち是れ深く信ずるの心なり、また二種あり、一には決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沒し、つねに流轉して出離の緣あることなしと信ず。

是れ實に善導大師の罪惡觀である、否な罪惡觀抔と觀の字を附けて言ふと却て呑氣にきこえる、大師自身の切實なる罪惡の懺悔であります。『歎異鈔』の中にも此の文が引いてある、併し之は後と致して先づ一字々々に此の文を味ひ度いと思ひます。漢字にすれば字數僅に二十餘字であるが、無限の味ひが存するのです。

初めに「深心といふは即ち是れ深く信ずるの心なり」深く信ずるの心である、浮いた淺い心で無いと言はれた、實に有り難い言葉です。次に「決定してふかく自身は是れ罪惡生死の凡夫——」一字と雖も浮いて無い、「決定して」と確かりと言はれてある。今日の信仰を言ふ人達は多くは決定抔出來て居無い。「斯う思ふと自分は惡いが」併し斯う思ふのも無理が無いな」抔と自分で活かしたり死なしたり爲て居るのは決定とは言へぬ。決定とは百千萬貫の力で斷定するのです。偖て如何に決定するかといふに自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と決定するのです。罪惡生死は人の上て無い、自分の上である、人も自分も人間はみんなさうだ抔と思ふてる間は眞に決定する事は出來ぬのです。信仰は无論誰でも信仰が無くては可かぬ、けれども信仰は皆んな合ひの事では無い、各自々々に得可べき者である。現に私如きは信仰が無ければ世に生きては居られぬ、若し無かつたら今頃は何に成つて居たか譯らぬと思ひます。信仰は各自々々の一人しのぎである、自分々々が現に是れ罪惡生死の凡夫なのであります。我々は苦悶して居る間は自分は罪が深い、非常なる罪惡を犯して居ると思うて居る一たび苦悶去れば全く忘れて居るのです。大師は力强く「現に」に言はれた。罪惡を感ずるのは現にて無くては可かぬ、我々は嘗て罪惡を犯した、或は時によると罪惡を犯し得る位に思ふて居るのは、まだ浮いて居るのです。例へば茲に人を殺した人が有るとする、今我々が其人の事を思ふにしても、若し自分に信仰が無く、佛陀の御惠みが無かつたなら自

分も人殺何程やつたかも知れぬ、又今では殺して居無いが如何なる事ありて人を殺さぬものでも無い、と自分も其人と同じ如く感じて初めて眞實に罪惡を感じるのであります。然るに我々現に人を殺した人と同じ如くに思へるかといふに出來ぬ、常に人の事とのみ思うて居るは誠に淺間敷き次第です。併し我々の罪惡は現にである、成程心の中では親を殺し子を殺し世間の凡てを殺して居るのである。「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫」とは如何にも人生より動かぬ一言であります。殊に大師は罪惡生死と言はれてある、罪惡と無常とを並べ擧てあります、生死無常は先程も申す如く何人も脫がれる事の出來ぬ最も明かな問題であります。然るに我々は之を知りつゝ猶ほ自分の上には此の大問題は無いものゝ如くに思うて墓無き生活を貪つて居るのです。初めにも申したが、親鸞聖人は「明日ありと思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは」の古歌を引いて明日を待てずして出家せられた。又承陽大師は親の臨終の席に於て、屍の枕頭の香の煙が暫時連續しては末は消にて仕舞ふ。之を御覽じて人間も香煙の如く一度消えては夫れぎりであると感じ道に入られたと言ふ事である。或は白隱禪師の時去る武士は花見に行つて瀧壺を見た、瀧壺の水の泡が出來ては消え出來ては消えするを見て急に菩提心を發したと申します。凡て斯くの如く少しく心を止めて見れば人生は悉く無常である、之を感せずして平氣て居る者が果してよいのであらうか。之を感ずる者は神經過敏であると言ふかも知れぬが、何れが本當だか解らぬのである。生死無常は何と言つても人生の事實である念々刻々何時我々は死ぬかも知れぬのです。人生は生死無常、我々現に其境に沈淪しつゝあるのであります。

次には「——曠劫よりこのかた常に沒し常に流轉して、出離の緣有る事無しと深信す」とある、之が實に力强い御文です。今言ふ如く我々は現に罪惡生死の境には迷ひつゝあるのであるが、之は今が初めてかと前方を見るになかなかさうで無い、實に曠劫已來の長の流轉であります。前生とか、輪廻とか思ふ時は何か知らぬと直ぐに理屈を考へ度く成る。去りながら說の如何抔を考ふるよりも——學說の如何抔を考へて居つては何時迄經ちても解かる時は無いのです。——夫よりも今現に我々の生活が泡の生活、煙の生活である、今我々は眼の當り罪惡生死の境に座して居るのであると、自分一人になつて其境に立つて見れば、曠却已來の大流轉は理屈離れて直覺的に解かつて來るのです。煙の立つのは今初めて立つのては無い、昔より立つてあつたのである。年々歲々花は同じ如く萎んでは咲き、咲きては萎んで來た。我々は曠却の昔より以來現に今日今時迄常に殁し常に流轉して來たのであります。而して今後は一點の希望でも有るかと言うに「出離の緣有る事無し」と斷言せられてある。之が眞の人生の有樣であります。此に於て我々は最早や一縷の手懸りも無い、實に罪惡の極である、無常の極である。我々は斯の如き者であると決定して深く信ぜよと仰せたのであります。善導大師の深信の文は、至つて簡單であるが實に難有い、一字一句と雖も動きの無い力强い文である、之を何の點より伺つても、盡きぬ味を頂く事が出來るのであります。

猶ほあの文を一括して言へば我々に一條の活路でもある時は決して深信は出來無いと言ふのであります。自分の力で善が出來る、自分の力で生死を免れる事が出來る、自分の力で斯くも出來るといふ考の有る間は決して深信は出來ぬ。決定して深く信ずるとは如何しても動かれ無いと云ふ極に達して初めて顯はれ來るのであります。善導大師は此の三心釋の後に二河の譬喩を說かれてある、既に度々話しますから事柄は諸君も御存じである、慥か先回にも申したかと思ひます。即ち人ありて無人空曠の途かなる處に來た、之は一人の善知識も無い事を言つたのです。其人四方を見るに一物も無い、我々が曠却以來流轉の有樣です。其何も無い處に突然一方より群賊惡獸が顯はれて、此人の單獨なるを見て競ひ來りて此人を殺さうと仕かけた。繪て見ると一方には虎蝎等が來り、一方には槍刀を持つた群賊が顯はれて斯人に攻め懸つて居ります。此の人仕方無しに一方へ逃げやうとすると忽然として大河に出た。其河南北に弘がつて涯が見え無い、而し北の河は火の河、南の河は水の河である。此人群賊惡獸の災禍を逃かれやうとすれば是非共此水火の中に押し込まれねばならぬのである。此に於て斯の人自ら思ふには

「此の河南北に邊畔を見ず、中間に一の白道を見る。極はめて狹少なり、二つの岸相去る事近かしと雖も何によりてか行く可き、今日定めて死せん事疑はず正しく至りて歸へらんとすれば群賊惡獸漸々に來り攻む。正しく南北に去り走らんとすれば惡獸惡蟲競ひ來りて我に向ふ、正しく西に向ひて道を尋ねて而も行かんとすれば、亦恐らくば此の水火の二河に墮せん事を、時にあたりて憶怖する事亦云ふ可からず、即ち自ら思念すらく、我今歸るとも亦死せん、住すとも亦死せん、行くとも亦死せん、一種として死を免かれず」

とあります。人生は何うしても此境で一邊行き止まる、而して此の行き止まりの境は必ず一度は來るのであります。偖て此の惡獸とは何かと云ふに實に我々の罪業である、我々は忽にして怒れる虎の如く、忽にして人を恨み人を嫉む蛇の如くであります。又惡賊とは自分の身體とか生活とか凡我々の身上に就ての一切の欲或は毒である、夫が自分を常に攻め立てゝ苦しめるのである。又火の河とは吾々の瞋恚を顯はし、水の河は我々の飽く事知らぬ貪欲心を示したものであります。貪欲の波瞋恚の炎は常に我々の內心を侵して暫も止む間は無い、而して我々の生命は今將に茲に盡きなんとして居るのである、氣着いて見れば如何にも我々は危險千萬に臨んで居るのである。之が即ち現に罪惡生死の凡夫の有樣なのであります。處て其罪惡生死の我々の上へ何うして救ひの道が開けるかといふに之は自分で求めて開けるのでは無い、道とあるは佛陀廻向の信心の一道である、此の道は斯の如く我々罪極はまも力盡きた最后に初めて我々に光を放つて下さるのであります。此は實に信仰上罪惡觀の味の存する點で最も能く味はう可き要所と思ひます。而して其味は二河の譬喩に最も明に顯はれて居るのです。

偖て斯人は今は一種として死を免れる事出來ぬ、彌々絕對絕命の極である。終に最后の決心を決めました。曰く

「されば我れ寧しろ此道を尋ねて、先きに向ひて而も行かん、既に此の道あり、必ず度すべし」

と。然るに此の人此の念を爲したる時忽ち東の岸に人の勸る聲を聞き、西の岸に人の招く聲を聞くのです。全體此勸むる聲も呼聲も昔よりありたれど今迄はきこえなんだのである。夫れが信じた時に初めて氣が着くといふのです。四方八面、今は一條の活路も無い、唯海の中間に一個の細道がある、既に此道あり、必ず行けると一念氣の着いた時に東の人の聲が聞こえた。曰く、

「君唯決定して此の道をたづねて行け、必ず死の難無けん、若し住せば必ず死せん」

と、又西の人の呼ばうて言ふには

「汝一心正念にして直に來れ、我よく汝を護らん、水火の難に墮せん事を恐れざれ」

と。其處で此人は

此人既に茲につかはし、かしこに呼ばうを聞きて即ち自ら正しく身心にあたりて、決定して道をたづねて直に進んで疑怯退心を生せず

と猛然として出立し遂に西方の彼岸に到達したと言ふのであります。どうも此の自分は實に仕方が無い者、手懸りの無い者、無有出離之緣であると絕望の極に沈みて救濟の聲を聞いたといふ味は到底言舌を以て顯はす事は出來ませぬ。今一例を取つて言ふならば、今日多くの人が苦むといふは自分で自分の罪惡を償はうとして居るのである、何とかして新たる人間と成り度い、善き人間と成り度いと悶えて居るのである。惡く言ふ時は信仰を求めるにしても自分が善き者とならんが爲めに信仰を求めて居るのである、夫だから何時迄も信仰が得難いのです。自分で自分が助かろうと思てる間はまだ眞實に自己の罪惡を知つたのでは無い。今殺されるといふ人が、自分は今殺されると聞いて仕方が無いと極はまつた時に道は前に來てあるのである、而して其道は即ち信仰の一道なのであります。世に佛陀の敎がある宗敎の安心があると云ふ事は何も我々今日初めて聞いたのでは無い、生れて落つるより既に耳の酢ばくなる程に聞いて居つたのである。乍去今日迄は眞實に其道に行く氣が無かつたから解から無つたのです。偖て今仕方が無いとなつて、殘るは唯此の一道である。既に此道がある、必ず行けるに違ひ無いと決心した時に東の方に人の勸むる聲が聞えた。聲といふのは大聖釋尊が此の土て信仰を御勸め下された聲てある、此聲は實は二千年の昔より響いてあつたのです。けれ共夫が今日迄我々には聞え無かつた、聞かうと爲無かつたから聞えなかつたのてある。すると又西の岸の上に人ありて呼ばうて曰く、「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、水火の二河に墮せん事を恐れざれ」と。實に是てす、之が佛の御呼聲である、茲が難有い處であります。其處て今の『散善義』の深心釋の次ぎには何とあるかと云ふに、

二には決定して深く彼の阿彌陀佛の四拾八願は、衆生を攝受して疑無く慮なく、彼の願力に乘じて定めて往生を得と信ず

とあります。此は初めの「――出離の緣有る事無しと信ず」といふのとは全くうらおもてで、懺悔の極が此の確信に顯は

れて來るのです。之て二河の譬と全く一致する、二河の譬に於て西岸上の「汝一心正心にして直ちに來れ――」といふ呼聲は即ち此の佛陀の願力を示されたのであります。

昨日九段では「超世の悲願」といふ題て話して來ました。此頃私は願力と云ふのが難有いと熟々と感ぜさせて貰ひます。今日は猶ほ少し之に就いてお話仕度いと思ひますが、全體私共、此の眞宗他力本願を聞き慣れて來た者は、自分に實際有り難いと知れる迄は、少しも本願の價値が解から無いのである。其處で一旦信仰に入らせて貰つて如來の大慈悲を喜ぶ上にしましても――夫は無論眞實の信仰であれば誰の喜でも異はりは無いのであるが、――どうも今迄に耳慣れて居た者には本願とか願力とかいふ言葉が割合に直接に響き難い傾きがあるのです。斯く云へばとて無論彌陀の本願を疑ふと言ふのでは無い。疑ふのでは無いが本願と言ふよりも慈悲、名號と言ふよりも救ひと言ふ方が心に映り易い傾がある。本願名號と正面より味ふよりも慈悲光明と頂く方が解かり易い感があるのです。併しながら段々と深く味はせて貰つて見ると本願と仰せられたには實に甚深の味があるのであります。

抑も我々は自分で自分の心に氣持善くなり、自分で自分に安心したりすると、夫で善いといふ位の手ぬるき考て居る故に僅の事で腰掛けて滿足して仕舞ふのである。けれども我は眞實に罪惡生死の凡夫である、曠劫已來流轉の身であるとなると、中々善い加減の事では安心が出來無くなる。於是か其の罪惡流轉の我々をしかと大願强力を以て牽き止めて下さる、之が大願の力なのであります。勿論慈悲に違はぬ、慈悲の大願なればこそ難有いのである。猶ほ夫れ處では無い、如何にしても救はずには置かぬといふ願力であります。若し光明と言ふならば如何なる佛でも皆光明ありである、併諸佛中の王、光明の極尊である今阿彌陀佛の本願とは何うであるか。我々如き怪しき者を如何にもして安心させ度い、曠劫已來の長き眠りより目醒せ無くては置かぬといふ佛陀の慈悲心の塊、之が阿彌陀佛の本願力である、有りあまる慈悲心の塊、即ち是れ願力であります。故に本願、願力といふは如何にも難有い語であります。

親鸞聖人の書かれた物を見ると皆本願、願力の語が用ゐられてあるのです。第一に親鸞聖人の常の言葉に信ずるといふ事を「佛願の生起本末を聞いて疑心ある事無し、之を聞くと言ふ」と言はれてある、信仰は佛陀の偉大なる願力を聞かして貰ふのであると云ふのです。又他力とは何うかと言ふに普通は心中が樂になつて一點自己の計ひの雜はらぬを他力と言つて居る。けれども聖人は「他力と言ふは如來の本願力也」と仰せられてある。如何にも心の樂になるのは本願が我心に届いて下されたからで、他力とは本願のお力であります。又念佛を稱して「選釋本願念佛」ともある。而して其本願を如何に言はるゝかといふに「本願は如來の御約束なり」と仰せられてあるのです。蓮如上人曰く

「阿彌陀如來の仰せられけるやうは、末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪は何程深く共、我を一心に頼まん衆生をば必ず救ふ可しと仰せられたり(御文)

誠に親が子に對する慈悲心である、目が醒めねば醒めるまで呼び起して下さる親の念力である。今本願とは即ち此の御約束を本願と示されたのである。夫て我々目が醒めたは全く此の念力願力の御恩であるのです。或は諸佛皆本願ありと言はるゝかも知らぬ、併しながら阿彌陀佛の本願といふはいかなる特色があるかといふに阿彌陀佛とは有らゆる惡人罪人を悉く救ふが則ち阿彌陀佛の阿彌陀佛たる所以なのであります。即ち阿彌陀佛の本願は度々云ふ如く善き人を救ふと言ふので無い、我々如き現に迷の人間を如何にもして救ふとあるが阿彌陀佛超世の本願であります。阿彌陀佛四十八願を建てさせられて何と仰せられてあるか。

我れ超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、斯の願滿足せずば、誓って正覺を成らじ

うつかり聞いて居つては解からぬ。亦今の『御文』では直に「阿彌陀如來の仰せられけるやうは末代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪は如何程深く共我を一心に頼まん衆生をば必ず救ふ可しと仰せられたり」とあります。今の時は實に末代である、我々若し釋尊の時代に生れ合はせたならば或は他の道て行けたかも知れぬ、けれ共今は末代である。親鸞聖人は和讃に於て『釋迦如來かくれまし〳〵て、二千餘年になりたまふ、正像の二時はをはりにき、如來の遺弟悲泣せよ。』と歎かれた。今は此の本願の一道ならてはとても助からぬ末代です。「末代の凡夫罪業の我等たらん者……必ず救ふ可しと仰せられたり」如何にも有り難い呼聲であります。此の呼聲を慈悲と云ひ、智慧と云ふ、無論夫て足らぬでは無い、去りながら其慈悲の慈悲たるは何かと言ふに「罪は如何程深く共必ず救ふ可しと仰せられたり」此の御約束の本願が人に罪惡觀を起させる根本なのであります。

阿彌陀佛の四十八願は一々數ふれば四十八てある、併しながら其結局救濟の本願といふは第十八の願であつて、他は皆斯く仕度い〳〵とある希望を擧げられた者であります。善導大師の『玄義分』には

法藏比丘世饒王佛の所に在て菩薩の道を行じ給ひし時四十八願を發して一々の願に言はく、若我佛を得むに十方の衆生我が名號を稱して我國に生れんと願ぜん、下十念に至る迄若生れずば正覺を取らじと

とある。之を二河の譬喩て頂けば「汝一心正念にして直に來れ、云々」の呼聲が之であります。此の一言を聞いて彼の人「決定して道を尋ねて疑怯退心を生ぜず」大に喜ぶとある、如何にも有り難い處です。其處で我々に眞の罪惡觀が起るのは何うかと言ふに、此の阿彌陀佛の本願がありて初めて眞の罪惡觀が起るのです。善導大師の『散善義』に「一には決定して自身は現に是れ罪惡生死の凡夫云々」「二には決定して彼の阿彌陀佛の四十八願は云々」とあるは實に難有い、罪極はまりて信仰が起り、信仰が頂けて眞の罪惡觀が起るのである。眞實の信仰と眞の罪惡觀とは同じ物であつて而もうらとおもてであります。未だお慈悲の見えぬ間は罪惡が實に苦しいばかりである。所謂群賊惡獸に追ひ詰められて居る氣持である。例ひ其罪惡を悲んでも此の間に於ては「如何にも我は罪惡生死の凡夫である」と根底からの心ずわりが出來たのでは無い。

起つても居ても身の置き處なく思はれるは猶ほ如何にもして自ら善く成り度い、罪惡の淵より攀じ上り度いと、猶悶へて居るのであります。處が一旦此本願力が解かつて見れば「疑なく慮なく彼の願力に乘じて定めて往生を得と信ず」絶對の安心が得らるゝと共に自分の眞個の罪惡を自覺する事が出來るのである。『唯信鈔』の喩では佛は崖の上より本願の網を垂れて呼んで居て下さるのです。此の救ひの網を見るなり罪惡に苦める我々には其網が切れる切れぬ抔と考へて居る餘裕は無い。必ず大丈夫「罪は如何程深く共」とある呼聲をきゝて疑なく慮なく此佛の御力で必ず行ける事と信ずる、否信ぜずには居られ無いのです。偖て斯く慈悲が解つてア、有り難いと信じて見れば「如何にも今迄は久しく苦んだ者であつた、此如き罪惡人をお救ひ下さるが佛の本願であつた」と唯頼ひは佛のお力計りであります。所謂岸に墮ちかけた者が手が離れて今落ちるといふ刹那に大なる手を以て支へられた、我々の手は離れて唯有るは佛の御力のみなのです。我々の手の有る間は猶ほ自分で勉めれば自分で行けると思ふて居るのである。彌々佛の御力で行かせて貰ふ時は則ち全く自力では行けぬと知れた時であります、自分は罪が深い、世は無常である、一刻も安心してはあられぬと苦しんだ者が今度は佛の御力で安心できた時初めて自力では叶はぬと知らせて貰へるのであります。

斯の如く眞の罪惡觀無常觀と救濟の味とは相離れた者で無く共に一のものであります。眞の罪惡觀は決して世人の思ふ如く自ら苦む事では無い自分は實に罪惡の者であると覺悟できた時が眞實の罪惡觀である、今一つ言へば佛陀の慈悲が頂けた時に初めて眞の罪惡觀も解るのであります。自分で罪惡より脱しやうと思てる間は其味は決して解らぬ、如來が有難いと解ればいつの間にか本當の意味で罪惡觀は顯はれて來るのであります。自分で自分の身體を支へて居る間は自分の身體の重さは解らぬ。何うすれば解るか、自分が天秤の上に自分を捨てゝ上つた時に解るのである。人間は如何にしても現在の自分を自分で惡いと思ふ事は出來ぬ、若し出來るならば其人は偉いが、悲哉そんな事人間にてとても出來ぬのです。或はあの時の自分が間違て居たと丈は思ふかも知れぬ、けれ共夫は現在の自分で過去の自分を否定した迄の事で矢張り現在の自分は其儘になつて居るのである。然るに如來の御慈悲に接して見れば何うであるか「自身は是れ現に罪惡生死の凡夫」と、全く自分の根が切れて居るのです。人生無常の有樣は如何にも劇しい、子が親に代る事も出來ず、皆日々に滅して行く、無常迅速は目前の動かす可らざる事實である。又自分の罪惡は如何であるか、何程清め度く思つても一厘一毛否な百千萬分の一毛をも清める事は出來無いのである、手を着ければ着ける程益々惡いのである。「自身は現に是れ罪惡生死の凡夫」とは實に誰も否む事の出來ぬ明かの事實であります。併しながら此の事實が眞に事實である味は佛陀の慈悲の解からぬ間は決して解から無いのであります。

禪家に於て「本來の面目を悟る」と謂ふ事を言ひます、抑も之は何であるか。我々が斯の如く日々うか〳〵と日を過し腹を立て抔爲て居る、是が本來の面目であらうか。或は亦佛

陀の慈悲が有つて我々を憐みて下さる事が本來の面目であらうか。我々の面目は決して日々のうか〳〵として居る有樣では無い、我々が本來の御親の顏を見て今迄は全く迷てあつたと解る時が初めて本來の面目が知れたのであります。其の本來の御親とは誰であるか、言ふ迄も無く阿彌陀佛の御親である、阿彌陀佛の本願が有り難いと頂けた時が即ち我々が本來の面目を悟つた時で、此上は何時死ぬても少しも遺憾は無いのであります。此の佛陀が解る迄は、我々現に罪惡に沈沒して居ながらも眞に之を知る事が出來ぬのである。罪深き我々が自分の惡しきに氣が附くといふは全く佛の惠みに接して初めて氣が附くのです。其處で若し御惠みで自分が少しでも善くなつたと思ふ人は餘程注意せねばならぬ、佛の御惠は、解れば解る程彌々自分の罪を感ずる筈である、而して罪を感ずれば感ずる程增々御惠を仰ぐより外無くなるのであります。處で實際に信仰に入りて自分を惡いと懺悔して居る人を他人が見る時は何うであるか。其人が佛を喜んで居る間に何時と無く佛陀の力が其人に及ぶ事は實に不思議であります。けれども之は他から見て言はるべき事である、其人自身に於ては自分は現に罪惡の極、曠劫己來流轉の身である、然るに大慈のみ親は其私の爲めに五劫永却の長々御苦勞下されたが難有いと、喜はせて貰ふ外は無いのです。

何うも話すと限りが無いが、此の五劫の思惟、兆載の修行と云ふ事實に味が深いと思ひます。此が果して有つたか無つたか抔と考へて居つては解らぬが、親は小供が墮落して目の醒める迄色々と力を盡して心配する、目の醒める迄心配が止まぬ、是が親の慈悲である。今佛陀は五劫の思惟をへて遂に成佛せられてあるは如何と云ふに、五劫の思惟兆載の修行に力を碎かれて、其の御苦心が今も止む間無く續いて居るのです。佛は今成道せられてあるからとて其御苦勞は今迄一と續きて現に我々が目の醒める迄種々に善巧方便を設けて我々の爲めに心を苦めて居て下さるのである。佛陀が佛陀と成られたは何うかと言ふに、木の火箸が火を焚く中に自らも燃えて仕舞ふ如く、衆生を助け度い〳〵と苦み給ふ中に自ら先づ成佛せられた者であります。佛は昔より今日迄我々の爲めに苦しみ我々の爲めに慈悲を垂れ我々の爲に苦勞爲て下された、而して今も又其の如く働いて居て下さるのである。而して「汝一心正念にして來れ」とある本願招喚の呼聲は今も響ける如く五劫永却の昔より響いてあつたのです。親鸞聖人は『歎異鈔』の結文に於て宜はく

彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば そくばく業を持ちける身にてありけるを助けんと覺し立ちける本願の忝けなさよ。

とあるが即ち本來の面目本來の親心が解つた處であります。其五劫思惟の大いなる親心は如何なる親心であるか。實に「そくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと覺ぼし立ちける」親心である。之が即ち本願である。既に本願にてろくばくの業をもちける身を助けんとある御呼聲なるが故に、之を聞き給ひたる聖人は之を喜びて「偏に親鸞一人が爲なりけり」ア、親鸞の如きそくばくの業をもちける身を、」と罪惡觀を起し給うたのである。そして其ろくばくの業をもちける

身にてありけるを助けんと覺し立ちける本願の忝けなさよと言へる御述懷が溢れ出たのである。そこで『歎異鈔』に引き續きて

今また案するに善導の自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み常に流轉して、出離の緣ある事なしと知れといふ金言に少も違はせおはしまさず

と、恰も聖人の御述懷と善導大師の深心釋とをぴつたりと引き合はせて此の罪惡觀の心相を遺憾なく御敎化下された。如何にも私は惡くありましたと親の膝下に頭を下げた時は惡しき小供の爲に昔より今に至る迄乃至幾萬年の末に生る迄相續して悲憐し給ふ親心の解つた時である。猶ほ要點を言へば其親心は如何に惡しくとも見捨てぬといふ親心である。其親心の反響が小供の胸に達して我身は惡しき者にてありし、現に惡し者也、猶ほ永久惡しき心の止む可き者にあらずと知らせて貰ふたてあります。『帖外和讃』にも

金剛堅固の信心は、　佛の相續よりおこる、
他力の方便なくしては、　いかでか決定心をえん。

五劫思惟己來佛の相續によりて初めて「決定して我身は現に是罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかた常に沒し常に流轉して出離の緣あることなしと深信する」決定心を起さしめ給ひたのである。此の決定心は同時に又「決定して深く彼の阿彌陀佛の四拾八願は衆生を攝受して疑なく慮なく彼の願力に乘じて定めて往生を得と信ず」る決定心である。『歎異鈔』には引き續きて猶ほ一層此の罪惡觀無常觀の心相を言ひ詰めて

煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろずの事皆以てそらごと、たわごと、まことにておはします

とある。煩惱具足の凡夫とは罪惡觀、火宅無常の世界とは無常觀、其覺悟の極まつた有樣が實にそらごと、たわごと、まことある事無き無有出離之緣の極である。其の大覺悟の裏一面に顯はれ來りたる大光明が「唯念佛のみぞまことにておはします」といふ金剛堅固信心であります。

All that we are is the result of what we have thought; it is founded on our thoughts, it is made up of our thoughts.

If a man speaks or acts with an evil thought, pain follows him as the wheel follows the foot of him who draws the carriage.

:———Dhammapada

聖傳

ジアータカ釋尊傳

五　成道

其時マーラ思へらく、王子悉達多は我が領より逃れんとす、我如何で逃すべきやと彼の群集に行き是れを告げ鼓を打ち鬨聲を擧げ魔軍を繰り出しぬ。

マーラの軍は今や菩薩の前後左右各十二リーグの多きに及び上方も九リーグの高きに至れり、鬨聲は大地もくづるゝ斗り十二リーグの遠きに達しぬ。マーラ二百五十リーグの高さなる大象に跨り自ら千臂を造り出し各臂にあらゆる類の武器を携へ、他の者共にも各異なる武器を持たしめて大聖を苦しめんが爲に出て立ちぬ。

大千世界の天使はなほ菩薩を絶えず褒め稱へぬ、天使長サッカは彼の喇叭ヴジャッタラを吹きつゝたてり。此喇叭は百二十キュビットの長さにして自ら風をして入らしめかく四ケ月間も止まぬ音を發するなり。

大蛇王は數百の詩句もて讃しつゝ謳ひて立ちぬ。

天使長マハーブラマは麗はしき白色の天蓋を菩薩に翳しつゝありき。

すはや魔軍押しよせたり菩提樹を圍みぬ、雲霞の如くに、あはれや天使は一人も止まるあたはず。

黑蛇王は地にもぐりて蛇宮マンジョリカにゆき五百リーグの宮に横はり手もて顏を掩ひつゝ伏しぬ、サッカは彼のヴジャユッタラを脊にして世界の岩多き端に止まりマハーブラマは世の涯の岩上に白き天蓋のみを殘してブラマの世界にゆきぬ一人の神も其位置を保つものなくして、たゞ孤獨、大聖のみぞ坐したまへる、マーラ軍隊に向つて曰はく、「友よスドホーダナの息子悉達多の如き人は世にあらず我等正面より彼に戰ふ能はず後より彼を擊たしめよ」と、大聖は三方を見たまひしに總ての神々は逃げたまひ彼等の場所は空虛になりて今や魔軍北方より雲と起り來れるを見るのみ、おもひたまふ樣、「我一人に對して此大軍其力と精とを盡し攻め來れり此處には父なく母なく兄弟なく又我を助くべき友もなし、されど十善は我が倉より養なひし侍者として長く我に在り、我は德を以て楯とし、義の劍を以てあたらん」と十善につきて思念しつゝ坐したまへり。

マーラ「いてやかくして彼を退ぞけん」と大旋風を起しぬ見よ、直ちに風は世界の四隅より起り立ちて一リーグ、二リーグ乃至三リーグの山も貫き、はた林の灌木喬木をふらばず根より覆へし、町も村もたゞ頽壞の跡となしはてぬるも大聖無限の威力はよくこれを遏絶せり、風は彼等に達する迄に力を失なひて君の御衣の一片をだに動かす能はざりき。

魔王又「水を以て彼を苦しめて死に至らしめん」と大雨を降らしめぬ、淸き空に黑雲むらがり起りて百重、千重に擴がり篠つく雨を下せり、而して流の激しきまゝに地は浸潤して

大洪水は森の樹木をも沒しぬ、されど大聖に達するや御衣の露おくあたりだに潤るあたはざりき。

次には岩の嵐を降らし、忽ち大なる巖は空中より火と烟をはきつゝ下りきたれり、而して大聖に近づくや奇しくも天華の花環となれりき。

又彼はいらだちて恐るべき武器の嵐を起しぬ、而してそは下り來りぬ――單刃兩刃の劍鎗又は矢――空より烟炎をさへ起しつゝ下りぬ、されど大聖に近づくや亦天よりの花とぞなれりける。

やがて炭の嵐は起りぬ、餘燼は空中にて火花をちらして燃ねつゝありしが未來の佛陀の足下に花の吹雪とちりぬ。

又もや灰の嵐は起りぬ、灰は火の雨と降り來りぬるも遂に旃檀樹の粉末と地に敷きぬ。

然る時に彼は砂の嵐をもて攻めたれど空中にありし時こそ微細にありしが下方にて煙り、火焔となりて未來の佛陀の足下に落ちしと見るまに天華となれりき。

次に泥の嵐は來りぬ、亦香物と變じけり。

魔怒りていでやこれによりてこそ悉達多をおどさめ、と濃き大暗黑を以てせまりぬあはれ闇は四倍となりて大聖をつゝみしも太陽の輝きいづる前の如く次第に消え去りたり。

かくマーラはこれらの九度の軍によりて悉く敗れぬ、風、雨、岩、武器、炭、砂、泥、暗黑、――彼を退ぞくることあたはず、彼たけりたちて軍を顧みて曰く「汝等など靜かに立てるや、いざ此王子を捕へよ、追ひ退ぞけよ」と自身は大象に乘りて未來の佛陀に近づき叫びて曰く「此座さらずやシッダータよ、そは汝に屬せず我有なるぞ」と

大聖宣はく「マーラよ十善の完成されしは汝魔王によつてにあらず大小の德も汝によりて成就されし事あらず、又無我の五行、涅槃を熱心に追求したまへる出家の五大行に自身を犧牲に供せし汝にも非ず、故に此座は汝に屬せず我に屬す」と

魔瞋恚の炎やみがたく、大聖に投鎗を投げぬ、されどそは花環と變じて彼の上に天蓋として止りぬ。魔軍すかさず岩と碎けよと巨大なる石をなげたり、亦花束と變じぬ。折しも世界を圍める天使の一隊は紛亂して進み來り前をみて曰く、

「失なへり、あゝ榮光と美の王子シッターダはうせたまへり、如何にして彼自身助け能ふべきや」と

然る時大聖叫びて宣はく、

「我は佛陀の總ての善を完成したまふ王位に達しぬ」と彼に向つてはたかり立てるマーラに向つて曰はく、

「此處を汝が有と證する者やある」とマーラ群を指して、「斯の如し」と云ふや魔軍より地震の如く響き渡りて叫聲起りぬ。曰く「我等は彼の證據なり」「我等は主の證人なり」と、誘者ほこりがに大聖に向つて曰く、「シッダータいざ證據を與へよ」と大聖除に宣はく、汝は生ける證據を有す、而して我は此處に於て些かも生ける證據は有せず、されど、他生に於て大施主たりしとき余があたへし數百倍の施物の證人は例へ無知覺なるにもせよ此大なる堅き地なり」と彼の衣の下より右手を差し出し地に延して曰く、

汝は嘗て我が大施主としての生に我が與へし大施物の證人なりや否や」と、

時に大地は聲を發して曰く「我は汝の證人なり」と百千の叫聲もてせまり來る惡者の軍のそれの如く應へぬ。

これをきゝて大象は君が大施主として如何に寛大にれはせしかを證認して大聖の前に膝おりて倒れふしぬ。魔軍膽を拔かれて此方彼方に散亂して二人すらも一所に止まる事なく、帽や衣服のみあとに殘りぬ。

天軍は魔軍の破れしを見て一聲に曰く、誘者はやぶれ王子は贏ちぬ、來れ、來れ、我等をして勝者を賞せしめよと、而して蛇や有翼の者、天使、天使長各仲間を誘ひて菩提樹下につどひぬ。

他の神々も亦大千世界に於て花環や香物を捧げて彼の褒辭を高く叫びぬ。時はまだ大陽の地平線上にありしときなりき、菩提樹亦彼に敬意を表し珊瑚の小枝の衣に落つる如き聲をもつてほめたゝへぬ。

かくして君は初夜に過去の智識を得たまひ、中夜に現在の智を終夜に己を惡世界に導びきし因をしりたまひぬ、かゝる中に全く十二因緣をきはめたまへり、世界は大洋に至るまでも震動しぬ。而して曉に至り全き大覺をを成じたまひぬ、何たることなきよろこびぞや、うべ、世は東西南北上下に長幟短旗目もあやに翻り、花及果物の樹は花を開き總なす果實を垂れて餘地もなきまでに掩ひぬ、蓮の華環は天より下り百合は七重になりて地より順次にさきいでゝ清香を放ち世は花の園の如く又解きかけし花束の如くめぐりぬ。

地獄は七つの太陽より發する光にて黑闇を散じ大洋の水ははかられぬ深さまでも美しくみえ、河流は其流を止めぬ、生れながらの盲者、聾者跛者は各見聞き歩めり。

かく無上の榮光と譽あらはれ他の多くの奇蹟は四方に起りぬ、佛陀感激したまひて總ての佛によりてうたはれし勝利の歌をうたひたまへり。

長くまよへりな長く、
いのちのひもにくゝられつ
多くの生をへたりけり。
生命、苦は
いつれよりかはきにけむ、と
たゞ徒らに求めつゝ。
あはれ生は忍びかたく
苦痛、死はまた我等をば
次のいのちにさそふなる。

おゝ見出せり見出せり。
汝、生死の源を、
汝ははや我が家ならず
汝が梁は破れけり、
汝がのきも亦かたむけり
移りぬ我心、涅槃のうちに
煩惱の終り、遂に達しぬ、

告白

佛陀廣大の慈悲

忠作次

永々人生上の事に付、悶え苦しんで居りましたが、此度圖らずも、佛陀不思議の御引接により、絶對の御慈悲を頂かして貰ひ、唯々佛陀の膝下に跪き、南無阿彌陀佛と稱へ奉る、感謝懺悔の外ありません。

此度先生の仰せに從ひ、難有き求道誌の紙面をかり、私の信仰前後の狀態を悉く披瀝いたしたい次第であります。

私は三四年前から、人生の意義如何んとか、宇宙とは何んぞやなどゝ、幼稚な頭に浮べつゝ居りましたが、段々と學校の教科書よりも哲學メイた本や、倫理書などを頻りと好んで讀み、而かも他の學友が眞面目に教科書のみにシガミ付て居るのを、心中竊かに笑つて居ると云ふ有樣でした、時に天人論出て、一時盛んに世評に上りましたから、早速購讀しました、サテ理屈丈けはドーにかコーにか分つたつもりで居りましたが、根底より堅く信じ得た譯でなかつた爲めか、段々と月日と共に腦になり、加ふるに其後一身上に不如意の事續出し、之れに對して不平を起し、不滿を抱き、茲に全く以前の主義瓦解し終り、時に不幸にも腦を痛め、學校を休み、ブラ〳〵して居りましたが、遂にヤケを起し、唯々現在安樂主義を取り、大に樂み、大に快を盡すべしとキメ込み一歩々と闇流に卷かれ、實に淺ましき人間となり果てました、此の時は基督信者の家に居りましたから、色々と宗教上の御話しを承りました、されど宗教心なき私なれば天にまします一人の神などゝ云ふ事、全々信じられず、眞面目に聞く氣にもならず、馬耳東風と聞き流して居りました。

夫の後上京いたしましたが、サテ今度は井の中の蛙大海に出たとも言ふべきで、鄕里に居るとは事違い、周圍の人は皆自分よりもエライ者ばかりですから、余り呑氣な事も言ふて居られず、少々眞摯に勉强しました、處が昨年春頃より又イロ〳〵不平病再發し、熟々世の無味乾燥なる、人生不如意なるを感じ、一夜斷然自殺を決しました、其の時日誌の一節に、

吾人五尺の身此の地に生る果して何を學び、何を成すべき乎、世の識者教へて曰く、「人生は向上にあり」「自我實現にあり」又曰く「人生奮鬪するにあり」と其他喧々囂々されど一つの安神を與ふるなし、唯吾人は戰々競々として生を營むのみ、何ぞ其の愚なる、余は今此の意義なき生を求むるより、むしろ穢れたる肉體を脫し、絶對自由の靈界に遊ばん……

書き終り机上にある聖書の研究と云ふ雜誌を見ましたに中に「自殺は罪の最も大なるものなり」と云ふ樣な事がある、サテ之れは大變なことが起きて來たと、勿論神などは信して居りませんけれ共、兎に角古より今日迄人生思想界を左右して居る覺者、スリキトの言はれた事なれば、マンザラ打消す事も

出來まいと、茲に死は思ひ止めました、之の一言は私の弱點を攝たのでありました、されど緣のなき時は致し方なきものにて、其後宗教などゝは夢にも思はず、唯宗教は神又は佛を假想して、之れに向つて三拜九拜して居るのだ、而してキリストは一神教にして第一に位し、佛教は單に未來と云ふ空想を畫き居るものにて、偶像を崇拜し、第二に位して居ると、こんな考を持つて居りました、かくて前途の光明は全くなく、無意味、憂鬱、不眞面目な時日を送りて居りましたが、昨年の暮に一寸歲暮の題にと詩を作らんと思ひ出し、過去及現在の事を色々と考ひましたが、上京以來己に二ヶ年、何事をなせしや、今後は如何の方針にて進むべきや、との命令心底にサヽヤキ、是れに對し何とも答が出ませんでした、鄕里にある老父を初め、兄妹は私の他日成業するのを唯一の樂しみとして汗を流して學資金を送つてくださるのである、然るに之の事も思はずツマラヌ不平な心起し、貴重の時日を徒費し終つた、實に申譯がない、同窓の友人は皆相當に進歩して居る、然るに僕は却て退歩して居ると、過去罪惡の行爲に對し良心の呵責勃然と起り、悔恨の情押へ難く、大に沈思默考しました、そこで今迄の失敗や、罪惡の行爲は、皆之れ人生不可解などゝ疑を起し、結局世の無意義なるを感じ、前途の光明を失ひ、而かも是れを解決する勇氣なく、ツマリ意志薄弱であつたからである、故に此の不解問題を解決し、所謂悟りを開かんければならぬ、然らば前途の光明は輝き希望湧き出て、世間の事掌を返す如きあらん、是れ先決問題である、今日より萬事打捨てゝ此問題を講究すべきである、之れが爲め世間より如何なる妨害、攻擊來るも、敢て辭せず、余が求むる處は眞理なりと、堅く決心し、先づ第一如何なる順序を採り如何る方法によるべきかを考へました、けれども何等得る所なく、徒らに悶へ苦しんで居りました、時に讀賣紙上に、河上氏の無我愛の眞理を悟れるを知り、早速同苑出版の雜誌を求めて讀みましたが、分りません、唯無我苑同朋諸君の生活狀態がなんとなくなつかしく感ぜられたから、一度行つて見ようと、一日寒風を冒して、巢鴨大日堂へ行き伊藤師に種々無我說を承りました、私は元來自己の爲めに自己の生命を得んが爲めなるに、自己を捨よと云はるゝのだから、所謂「吾れを捨てんとすれば捨つるに能はず」て全く腑に落ちず、實に失望落膽しました。

曾て九段第二求道會へ一寸立寄り、先生の講話を承りました事が有りました、其時先生は難有相に佛樣の御悲慈を說かれて居りました、何んと面白い事を說かれて居らるゝと其時は更に感じませんでしたが、終りに「人生の事柄は信仰以後でなければ分らぬ」との一言耳底に留まつたのが、此の失望中に想起し、今一度行つて見ようと、ノヅキ込みました、此の時は暗夜の燈明と云ふ題でした、御話しはサ程有り難いとは感じませんでしたが、先生の愉快氣にして居らるゝのが非常に羨ましく、信仰者の日暮は如此者か、ドーモ御利益がありそうだ、私も是非先生に願つて、生活を共にして頂きたい、そうすれば信ずる樣になるだらうと思ひ、講話後、早速ロク〳〵禮もせずに、先生に願ひました、所が舍は滿員との事でした、それから苦悶の狀態を訴へ、安神の方法を求めました、

先生は御多忙中にもかゝわらず、恰かも慈母の子に對する如き溫顏を以て、懇々と御話しくだされ、或る女の人の告白文（本年二號の告白文なり）を讀みきかせてくだされました、不思議にも其の女の人は私と同じ宿に居らるゝ人でした、其の時私の喜びは一方ならず、殆んど暗夜に燈明を見付けた樣な心持でした、玆に初めて先覺者の導きの綱に攀まるを得、宗敎に心を注ぐ樣になりました。

早速歸宅し御飯メコ〳〵に過ごし御話しを承りました、其の時申さるゝには、あなたは生れない前より、已に佛樣の御慈悲を蒙りて居らるゝのであります、例へば兩親がチャンと御飯の用意を調へ、そして、あなたにタベヨ〳〵と云ふて、居らるゝのに、あなたは唯ヒモジイ〳〵と空腹を訴へるのみて、タベナイのであります、兩親も、之れには如何んとも致し方ありません、だから早く難有い事と思ふて、頂きなさい、かくあなたと同宿するのも、皆之れ佛樣の御手廻してあります、屹度御悲慈を難有頂かして貰はれますから、心を落ち付て、先生の御說敎を聞きなさいと、御親切に話されました、之れは今思へば佛樣は、私の無智頑固なる哀み給ひ、偏に先生と其の人との袂に縋がり付き、法を求めよと、言はれたのてありました、處が其時私は、佛樣の御手廻してなく、之れ余が幸運なりと、喜びました、實に申譯ありません、其の夜朝三時頃迄に信仰の餘瀝を悉く拜讀しました、其の後は懺悔錄や、求道雜誌など、頻りに讀み、先生の講話も休む事なく、熱心に承りましたが、少しも心安からず、私は迚も、佛陀の慈光に浴する事は出來ない、自分は人心付てからの行爲を考ふるに、悉く僞善であつた、虛僞奸詐の行爲であつた、如斯罪惡極まる人間、などて、佛陀の救ひに預かること出來よう、如何に慈悲の塊なる佛陀と雖も、私には呆れるだらう、生れ落ちてから、法律上の罪は一度も犯したことはないが、然し內心を解剖すれば、道德上の罪を狀した事は、實に極りない、正に是れ死刑に處せらるべきである、今後、生き永らへて、罪を重ねるより、速度に死して申譯しませう、是の上罪を重ねるには忍びない、又翻て社會の人を見るに、矢張り皆僞善家である、國家のため、人類のためと、口には立派なこと言ふけれど、其心中は、實に恐るべき人肉を食ふ鬼である、相對世界とは畢竟鬼の集合團體である、百鬼夜行とは此の世の有樣である、外菩薩、內夜叉とは、事實である、親鸞聖人の言はれたを看よ汝が胸底に潛めるは毒蛇にあらずや汝が胸奧に懷けるものは惡しき蝎にあらずやとは眞を穿てる御言葉であると非常の罪惡觀に打たれ、夜床の中に冥想する時は、恐る百鬼群をなして、我れに向つて來り、又毒矢を以て身を刺さるゝが如く感ぜられ、迚も安眠に耐えませんでした、結局死より外に、道なき次第となりました、時に女の人は私の顏色甚だ變つて居つた爲めか、種々私に尋ねましたから、私は此の考を、悉く話しました、處がそんな苦しむことは決してありません、あなたは余り氣を揉むからいけませんとて、歌を敎へてくだされましたその歌は

氣をもみて岸をかへるは釣の下手
心落ち付け魚のよるまて

ア、誤つた、僕はたしかに釣の大下手でした、是の一言がな

かりせば、私は今將さに岸を替へる所でした、どうして魚が釣れるものてすか、此の歌は其の後苦む時、救ひの杖となりました。

玆に一寸書き付けたいのは、其後此の人は鎌倉へ御出になる事となりました、其の時私の悲しみは、何ん共言ひ樣ありませんでした、私の生命は此の人と、先生によりて繫がれて居りましたのに、其の一本の糸が、なくなるのですから、悲しくて〳〵一夜此の大男が聲を出して泣きました、今から考ふると其の時は、精神に異狀を呈して居つたかと思はれます、兎に角非常に悲觀に陷つたことは、此の邊て御察しください。

其後先生に百鬼夜行の感想を御話しいたしました、先生の言はるゝには「成程百鬼夜行と思ふも無理ならぬことてある、然し君は鬼を標準にして事を考へ、鬼にたよらんとするから悲しくなるのてす、されど周圍の者は何んてもよろしい、それに頓着することはない、其の百鬼夜行の中に、一人の慈悲ある友人ありて、君に萬腔の同情をよせ、苦樂を共にすると誓つたら君はどうする、是の場合には、慈悲ある友人に、たよるより外ないてせう、此の慈悲ある友人こそ、即ち佛陀てある、佛陀は常に慈悲の涙を以て、吾人に向いつゝ居らるゝのてある、和讃に「無明長夜の燈炬なり、智眼暗らしと悲しむな」と言ふことがある、君は今、無明長夜てある、智眼暗しと、悲しんて居る、サテ其の無明を照す燈炬てあると言ふ事を少しも考へない、此の燈明を見出すことが、大切である、さすれば智眼暗しとて悲しむ事もない、百鬼夜行も、今度は渡る世に鬼はなしてある、」と此の時恰かも黑き慈悲ある人が、私の前に居らるゝ樣に思はれ、其後いつも私の傍らに居る樣てした、ソコデ私思ふには佛はかく黑き者てはない、无碍光佛と言ふてはないか、依て此の黑き者が、光る樣にならなければならぬと、無理に光る樣に〳〵と、之れに向つて一心に、南無阿彌陀佛と稱へたれど、一向有難くならん、又無理に之れに說明を付けて曰く「宇宙の萬物は、悉く宇宙以外、或る絕對不可思議なる力に支配されて居る、此の力あるに非ざれば、吾人は一指も動かす事が出來ない、此の力を名づけて佛陀と言ふ、」と、佛陀は吾人の假設にあらず、とは屢々先生から承つたけれども、苦し紛れた色々な忘想を起しました、余程悟り得た考て、先生に御話しいたしました處が、先生は「そんな事を考へなくともよろしい、宇宙が何んてあらうが、山が崩れ樣が、川が西に流れ樣が、夫れには關係ない、君の今求ることは、佛陀の慈光てある、宇宙問題てない、嘆異鈔に宇宙などゝは一言葉もない、親鸞聖人は宇宙の說明はなされなかつた、」と言はれました、私もガッカリして、道々考ふるに、先生は私の言ふ事を、未だよく分らないのだと、聊か自分の考に望みを囑して歸つた、スグ嘆異鈔を拜讀するに、第一章は無事にすんだが、第二章に至り「各々十余ヶ國の境を越えて、身命を顧すして尋ね來たらしめ玉ふ御志し、偏に往生極樂の道を問ひ聞かんが爲めなり、然るに、念佛より外に往生の道をも存知し、又法文等をも知りたるらんとこゝろにくゝ思召しおはしまして侍らんは、大きなる誤りなり、若し然らば、南都北嶺にもゆゝしき學生たち、多く座せられ

て候なれば、彼の人々にも遇ひ奉りて、往生の要よく〳〵聞かるべきなり、親鸞に於きては、唯念佛して、彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて、信ずる外に別の子細なきなり……」

ア、今迄此の二章を何んと思ふて讀みつゝあつたか、如何に愚なる私でも本日先生に申し上げた事が、恥かしくなり、次の日曜講話には、迚ても顏出し出來ない樣になりました、嘆異鈔は難有い本だと、此の時始めて感じました、夫れから今後の注意として、左の二ヶ條を定めました、

一、嘆異鈔、信仰の餘瀝、懺悔錄、求道の外一切讀まざる事

二、佛陀を無理に客觀的に作り出さんとの忘想を起さゞる事

右二ヶ條を注意して、守らんと勉めたけれども、矢張り假說の佛陀を念じつゝ居りました。私の講話を拜聽する時や本を讀む時などには一種の大害がありました、それは此度の講話には是非安神しなければならぬ、此の本を見て必ず安神を得なければならぬと、自力を捨て他力に依らんと致したはよろしいが、他力の信仰を矢張り自力で得ようと努めて居た事でした。

三月になり先生は法要を營まれん爲めに、鄉里へ御歸りになり、最早講話も承ること出來ず、本も實は飽きる程讀み盡し、又昨年以來の苦しみに、加ふるに今年一月以來の苦しみは、一方ならず、飯の味も分ちなく碁す事六十余日、爲めに全く意氣沮喪し、最初佛は私如き罪深き者には殆んど呆れるだろうと思ひましたが、今度は私の方より愛想がつき、か程に迄苦しみ、恰かも渴者の水を求むる如く切に救ひを賴むのに少しも慈悲をかけてくれず、慈悲の塊智慧の塊などゝ云ふは一寸過言でないか、それにしても先生は講話の度毎に此方の求むる力で求めらるゝものでない、佛陀より玉はるのだと、頻りに言はるゝが、全くそうかしらん、與へらるゝ時には、自然に與へらるゝであろうと自然に放任し、久し振りて散步に出かけ二三日は遊び暮しました、然し何處へ出るにも嘆異鈔、信仰の餘瀝を懷中より放しませんでした。

或る朝早く起き出て室內を淸め心爽快なるに乘じ求道第三卷第一號の嘆異鈔の講義を拜讀いたしますと眞先きに。

「彌陀の五刼思惟の願をよく〳〵案ずれば偏に親鸞一人がためなりけりされば、そくばくの業を持ちける身にてありけるを助けんと思し召し立ちける本願の忝けなさよ」と拜讀するや否や彌陀の五刼思惟の願は、偏に私如き者の爲めであつたか、されば、此の大惡業を持ちける私を助けんと思し召し立ちける本願の忝けなさよと、一時に五臟六腑にしみ渡り、實に勿體ない事であつた、今迄此の難有いことを知らずに居つた、アヽ、申譯がない、彌陀五刼思惟の願は兆載永刼の昔より私の如き凡夫一人のためであつた、之れを知らずに居るとは何んたる愚であつたろう、されば、かたじけなくも我が御身にひきかけてわれらが身の罪惡の深き程をも知らず如來の御恩の高きことをも知らずして迷へるを思ひ知らせんがためにて候ひけり」

嗚呼余が如き凡夫迷ひの迷ひたるを知らずして居るのを哀れみ給ひ或は善導大師、或は親鸞聖人と化身せられ、遂に近角先生の手を經て私を救ふてくだされました、何んと申譯すれ

ばよろしいか、何とも言葉は出ませんでした、机に向つて居ることも出來ず、胸がはり裂ける樣てすから忽ちふとんを被りて一生懸命に南無阿彌陀佛々々と稱へ精神を靜めんと努めたけれどもふとんの中が明るいようて、迚てもコラへきれず、又起き出てゝ室內をグル〳〵廻つて居りました、此の時の感謝の情は迚ても言葉にも筆にも言ひ現すこと出來ません。

玆に全く淸淨なる別天地に生れ出して頂きました、回顧すれば今迄の出來事悉く大慈大悲の彌陀佛の御手引て有りました、求めんと努めた時に苦しみ、捨てた時に不思議にも目を醒まして頂き、唯々慈光のきはまりなきに感謝するのてあります。

其後求道第二卷九號「捨身求法」の講話を拜讀し一層有り難く頂かして貰ひました、玆に書き拔きたいけれども重復の恐れありますから略しました、御緣のある御方は是非是の九號を御讀みください、其の一句に

我れは此の法の爲めに即ち身を捨つるなり名聞や財產乃至轉輪聖王四大天王の如き人天中の快樂を得んが爲めにあらず一切の衆生を利益せんが爲めに此の身を捨つるなり

と其の御慈悲の廣大なる何んとも云ふ樣のない有り難い御言葉てあります、私の今迄信仰を得よう、安神を得ようと努めたのは、ツマリ之れによつて自己の人格を高め、又今迄の罪惡の行爲を取り消さんために若しみ此等欲望の材料にせんとしたのであります、實に慚愧に耐えません。

誠に佛陀大慈大悲の御心は唯矜哀を以て滿され迚ても吾々凡夫の計り知るところでありません

觀音勢至諸共に　慈光世界を照耀し
有緣を度してしばらくも　休息あることなかりけり

此れ彌陀佛の本願てあります、何んとも讃仰の辭はありません。

私は不思議にも如斯大慈大悲を有り難く藏かせて貰ひ、唯々感謝の涙に咽ぶのみてあります。今後の事は「弘誓の船に乘りぬれば大悲の風に任かせたり」て何にも心配はありません、無量劫を盡し無邊際を究め恍惚として佛陀慈悲の懷に抱かれて日を送ります。

南無阿彌陀佛々々々

蛇蝎奸詐の心にて　自力作善は叶ふまじ
如來の廻向賴まては　无慚无愧にて果てぞせん

諸佛の大悲は苦あるものに於てす、心偏に常沒の衆生を愍念す、之を以て勸めて淨土に歸せしめたまふ。亦水に溺るゝ人急に偏に救ふべきが如し、岸上の者何ぞ濟ふを用ゐん

（玄義分）

講義

歎異鈔

第壹章（續）

近角常觀

彌陀の本願には老少善惡のひとをゑらばれずたゞ信心を要とすとしるべし、そのゆゑは罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします

是れ上に擧げたる彌陀の誓願不思議の不思議たる點を示し給ふのである、彌陀の本願には十方の衆生と呼びかけたまふのである、既に十方の衆生とのたまふ以上は如何なる善人も如何なる惡人も皆此中に洩るゝことはない、法然聖人白河の御房に於て、夜もすがら御說法したまひし時のたまはく「もとより十方衆生の爲なればいづれの機かもれ、いづれの輩か捨てられむ、十方衆生のなかには有智無智、有罪無罪、凡夫聖人、持戒破戒、若は男、若は女、善惡の人乃至三寶滅盡の時の機までみなこもれり」と、實にこれ椽の下の耳四郎をして改悔懺悔せしめたる御敎化である、御言葉の如く十方衆生と云へる御呼聲は老少善惡、貧富、貴賤、賢愚、男女、道俗すべて一切群生何等の區別をも見とめたまはぬ無緣平等の大慈悲を示したまひたる御言葉である、蓋しかくの如く彌陀の本願には何等の區別もなく、總ての人を簡はず平等にむかへたまふことを著しく示したまひしは慈愍三藏の御釋文である、曰く

彼佛因中立弘誓　聞名念我總迎來
不簡貧窮將富貴　不簡下智與高才
不簡多聞持淨戒　不簡破戒罪根深
但使廻心多念佛　能令瓦礫變成金

親鸞聖人は之を行卷に引き又唯信鈔文意の中に此釋文を和らげて懇々と示したまひてある、帖外和讃にも之を簡單に述べたまひて「多聞淨戒えらばれず、破戒罪業さらはれず、たゞよく念ずるひとのみぞ、瓦礫も金と變じける」とある、一言身に泌み渡る金言である、又信卷にも引用したまひし元照律師の釋文にも左の如く云ふてある、

念佛法門不レ簡二愚智豪賤一不レ論二久近善惡唯取二決誓猛信一
臨終惡相ナレモ十念往生ス此乃具縛凡愚、屠沽下類刹那超越成
佛之法ナリ可レ謂二世間甚難信一

上慈愍三藏の釋文を唯信鈔文意に和らげらるゝときに、又此元照律師の釋文をも並べ擧げてある、實に聖人の御眼に止りたる雙璧の文字である、貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞と淨戒を持てるを簡ばず、破戒と罪根の深きとを簡ばずといひ、又愚智豪賤を簡はず、久近善惡を論ぜずといふ、今本文に彌陀の本願には老少善惡の人をえらばれずはこれである。併此等の文字を單に文字として味ふては彌陀の本願を頂くことが出來ぬ、眼前の事實で知らして貰はねばならぬ、數年前久しく私の所にて帳面を附けたり雜誌の封紙を書きたりして居りし小僧さんが先日病氣にて亡くなつたそうである、年は猶若けれど念佛を稱へつゝ笑ひながら死したそうである、私は之を聞きて悲哀の中にも實に如來の御慈悲を頂くには老少の區別なきことを面り知らして貰ふた、又數日前にも發狂して絕食して心臟麻痺で亡くなられた憐むべき人があつた、其人の近親が信仰家であつたために臨終に及びて力をこめて如來の御慈悲を說きて聞かせ唯念佛せよと勸めたるに口を指して稱へることが出來ぬといふ事を知らした、然らば私が稱へる故に其心持になりたまへといふて其人を抱き頂に接して念佛しつゝある間に頭をうなづき、心中大に喜びて久しからず亡くなられたとの事である、觀經の下品下生には此人苦に逼られて念佛するに遑あらず、善友告て曰く、汝若し念ずること能はずんば應に南無阿彌陀佛と稱すべしと是の如く至心に聲をして絕えざらしめ十念を具足して南無阿彌陀佛と稱す、佛名を稱するが故に念々の中に於て八十億劫生死の罪を除くとある、然るに今話した人の如きは口に稱へることすらも出來なんだ、唯嗚呼難有いと頂きたゞけて、口までも出ぬのである、是こそ實に彌陀の誓願不思議に助けられて往生を遂ぐるなりと信じて念佛まうさんと思ひたつこころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」の具體的の御敎化である。

かくのごとく若きも老いたるも、善人も惡人も臨終惡相なるも、心にあり〳〵佛を念ずることが出來ずとも夫には拘はらぬ、されど唯一つ如來の御慈悲を頂きて曠劫已來久しく沈みつ浮みつ今日に至り、また未來永々劫唯苦惱の邊涯なき私を悲憫したまふ大慈大悲の御親心を承りて嗚呼難有いと一念信ぜさせて頂くのが肝要である、法然聖人が白河の房にて御說敎のときも「その機をいへば十惡五逆、四重謗法闡提破戒破見等の罪人、その行を論ずれば十聲一聲いかなる嬰兒もとなへつべし、その信をいへば、一念十念、いかなる愚者もおこしつべしとある、如來の御慈悲はいかなるものも簡ひなき御慈悲であるが之を頂くのは信心の一つである、上に擧げたる和讃にもたゞよく念ずるひとのみぞ瓦礫も金と變じけるとある、又元照律師の釋文にも「唯決誓猛信を取れば」とある前の本文にも往生を遂ぐるなりと信じてとある念佛まうさんと思ひたつ心の起るときとある、即信業開發の一念である、今本文は殊に其點を著しく示したまひてたゞ信心を要とすとしるべしと力を込めて押へて下さつたのである、十方衆生の御呼び聲は何人も簡びなきも三信十念の信行、即信ずる一つ、行ずる一つ猶手短かに言へば如來の御慈悲を難有いと頂く信心一つで助けて下さるのである、信心とて外の事があるではない、如來の御慈悲に氣附かせて下さるとである、上に擧げた小僧さんも微笑して御助けを仰ぎて念佛しつゝ亡くなつた、發狂の人も心に即慈悲を感しく頂かれたのである、和讃に「五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてゝ、自然の淨土にいたるなれ」、「金剛堅固の信心の、さだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける」此金剛堅固の信心は自分の起す信心ではない、如來より起したまひ、如來より賜はる信心である、すなはち本願に信行を誓ひたまひたるが既に如來の回向成就したまひたる次第である。

先日態々薩摩の國より、求道の爲めに上京せられたる人が

あつた、御自身は如來の御慈悲を喜ばれつゝあるが、年來一つの不審ありとて心を開きて披瀝せられた、夫はこうである、抑々如來樣は如何なるものをも簡はず助けたまふ廣大無邊の御慈悲を垂れたまふに實に恐れ多く申し上げにくき事なれども、何が故に信ずるものを助くる、たのむものを助くるとの御仰なるや、如何なるものでもと呼び掛けたまふこと實に嬉しき限りなれど、信ずるもの、たのむものとある御一言が際立ちて何となく廣大無邊の御慈悲に限りが出來、邊際が出來たやうに思はれます、こは必ず何かの誤とは存じつれど同じことなれば信ぜずとも、たのまずとも、との仰を蒙りたき心地するは如何のものに候はん、こは御慈悲に慣れたる横着なる心とは覺悟はしつれど年來不審のはれやらぬふしに候へば、遠方より尋ね參りたる所詮に打明けて教を請ふとの事であつた、實に思ひ切つた尋である、此尋か讀者諸君の胸中に如何に響くか、之に答へて、信ぜねばならぬ、たのまねばならぬと言はんか、益々不審を增すのみならず却て自力に陷らしむることゝなる、然らば信ぜずともよいたのまずともよいと答ふべきか、近時行はるゝ無條件の救濟とか、たゞの御助とかいふ言葉は或は此の如き意味に用ゐられて居らぬか、少くとも此の如き誤解を來たさしむる虞がなきか、此問に對して然りと答ふべきか、否と答ふべきか、言へば間違ひ言はねば分からず、抑々法門と心得て居る間は如來の御慈悲は頂けぬ、私の答は左の如くであつた、抑々如來の御慈悲を頂くに、自分か如來樣と衆生の間に立ちて横から傍觀して居る心持で居るゆえ分らない、自分が如來の仰を取次ぎて衆生に屆ける心持ゆえ、同じことなら信ぜよたのめの御言がなかつたならば衆生が頂き安きであろうなどと思ふのである、是は畢竟信心と引換に救濟が與へらるゝやうに思ふからである、全體信仰問題は如來と私との問題の外はない、人に說くのは自分が如來の仰せを頂く心持を告白すればよいのである、さて我々が如來の仰せを頂く心持を考へてみるに信ずるたのむといふは如來の御慈悲を頂く條件ではない、如來の御慈悲の頂けた心持である、如來の御慈悲に氣の附きた一念である、此一念なしに御助けを得やうと思ふは入口を通らずに家に入りたいと言ふやうなものである、本願に此信心を御誓ひ下されたは其入口を知らして下さつたのである、其入口までも御成就下されたのである、信するものを助くるとの御本願は即ち信ぜしめて助けて下さる御慈悲である、「信卷」の三信釋に聖人は「一切の群生海無始より己來乃至今日今時に至るまで穢惡汚染にして清淨の心なく、虛假諂僞にして眞實の心なし」と仰せられてある我等自身では眞實もない、信心もない、回向心もない、故に如來は我等に對して眞實を以て大慈大悲を起して回向したまふとの事である、此如來の大慈大悲を聞きて吾等は信ぜざるを得ぬやうになる之が即ち信心である、故に吾等が大慈大悲を頂くことの出來るは全く本願に信心までを成就したまひたるからである、如何なる惡人でも信ずるものを助くるとの仰は如何なる惡人でも信せしめて、助くるとの仰である、か、薩摩の方に御答をした、今本文に信心を要とすとしるべしといへるは此如來の御慈悲を頂く信心一つは干要である、との御教化である

そのゆえはつ罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてましますとはいよ〳〵本願の眞面目を正面より言ひあらはされたるものである、彌陀の本願は十方衆生いかなる人間も簡ばす老少、善惡、男女、賢愚の區別なく唯佛の御慈悲を仰き喜ぶ信の一つにて助けらるゝ所以のもの、抑々本願の眞意、彌陀の本願は罪惡深重煩惱熾盛の人を助けんとする廣大無邊の御悲慈であるからである、是實に歎異鈔全部を貫徹する骨髓である、而して正にこれ親鸞聖人が本願の正意を開顯したまひたゝ眼目である、抑々大無量壽經の本願に十方衆生とあるも如來の殊に悲憫したまふは凡夫である惡人である、されば釋尊は唯五逆と誹謗正法を除くと誡めて邪見に陷らぬやうに勉めたまひしかと、遂には王舍城中に大騷動が起り大隱謀が企てられ、大惡逆が行はれた、提婆は釋尊に謀叛した、佛の教團を破壞せんと企てた、加之佛の大檀越たる摩訶陀國王頻婆沙羅王の太子阿闍世を教唆して其父を殺害して王位を簒奪せしめんと企てた、阿闍世太子は父王を獄に投して食を與へない、國の大夫人韋提希は密かに食を運んだ、阿闍世太子は怒りて亦母を獄に投じた、韋提希は獄中に愁憂憔悴して佛に請ふて佛を求められた、佛自ら獄中に入りて法を說きたまひたが即ち觀無量壽經である、五逆の罪人阿闍世王も出來た、誹謗正法の惡人提婆も出た、況んや女子たる韋提希夫人は最も悲酸たる境遇に陷り、頻婆沙羅王は死に垂んとしつゝある、此時に當りて大聖釋尊の與へたまふべき法は他はない、阿彌陀佛の大慈悲のみである、韋提希夫人は彌陀の淨土を欣求して如何にして之に生るべきかを尋ねた、佛微笑して出世の素懷をあらはし韋提希に告げたまはく、「汝今知るや否や阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝正に念を繫けて彼國の淨業成したまへるひとを觀すべし」と、聖人は化卷に此語を釋したまひて本願成就の盡十方無碍光佛を觀知すべしとある、いよ〳〵本願の正意を顯はされた、下品下生にいたりては五逆十惡具諸不善の惡人も十聲稱佛の下に助けられた、獄中の頻婆沙羅王も佛微笑の光明を拜して安慰を得て瞑せられた、父王を殺した阿闍世も終には後悔痛恨して憂悶懺悔其極に達して遂に亦佛の大慈悲を蒙りて助けられた、是實に罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんための願が事實上に顯現し來つたのである、されば之を聖人が教行信證開卷に、難思の弘誓、無碍の光明を擧げて直ちに然れば淨邦緣熟して調達闍世をして逆害を與ぜしめ、釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり云云と說き、また信卷の終りには長々しく涅槃經の阿闍世王か大煩悶の後信仰に入りたる事實を示したまひて本願醍醐の妙藥であると說きたまひたのである、此事實は詳しく拙著「懺悔錄」の中に叙述し、又『信仰問題』の中の信仰論の下にも論じ盡してあるから此には畧して唯此の如き大惡人阿闍世王が信仰に入られたときの心相を述べてみれば、今まで後悔の念止みがたく悶へ苦しみつゝありし阿闍世王が今まで怨をなせし佛陀より却て非常の惠みを頂き佛陀は懇々としてたとへば病子に對して父母の愛偏に重きが如く如來も殊に罪あるものに對して心偏に重しといひ、頻婆沙羅王往昔佛を供養せしが爲に王となり其王位を貪るが爲に汝之を害した次第である故に汝若し罪を得べくんば諸佛世尊も亦た從て罪を得たまふべしとまで說きた

まひた、そこで阿闍世王は忽ち大歡喜を生じて大に佛の御慈悲を喜ぶ心が俄かに生じて來た、そこで嘆して曰く、「世尊我世間を見るに臭き伊蘭子より伊蘭樹を生ずるを見た、未だ伊蘭子より香しき栴檀樹を生ずるを見なんだ、しかるに不思議なるかな今始めて我身の如き臭き伊蘭子の身中に蒔きもせぬに栴檀の如き香はしき信心が生じた、我古より佛法僧を信せず、遂に空しく地獄にて永く苦むべかりしに今佛を見奉りた御蔭で助けられた、此佛の功德は我が助かるのみならず衆生の惡煩惱を破壞して下さるに違ないと喜ばれてそこで佛は善哉々々汝實に一切衆生の惡心を破壞する源を作りたと褒めたまひた、阿闍世王は感激の餘り佛に感謝して曰く、

如來爲一切　常作慈父母　當知諸衆生
皆是如來子　世尊大慈悲　爲衆修苦行

如人著鬼魅　狂亂多所爲

これ實に信仰の極所である、親鸞聖人は此言を自分の上に引當て、常に喜びたまひたものとみゐて晩年の作なる聖德和讃の奥書にかきてある、又信卷に阿闍世王の文を引く前に悲哉愚禿鸞沈沒於愛欲廣海迷惑於名利大山不喜人定聚之數不快近眞證之證と懺悔したまひてある、そして歎異鈔は其聖人の自督を傾けて罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんが爲の願にてましますとのべたまひたのである、是此講義の初に申せし如くわが御身にひきかけて我等に如來の御慈悲を知らして下さるのである、近代の念佛者後藤祐護老師の臨終の御懺悔が何より難有い、曰く、極重惡人、無他方便唯稱彌陀、得生極樂

如來慈光之下益々御健勝御布教に御盡瘁之段奉欣賀候小生歸國以來は度々御芳翰を送られ殊に父死去之節は御悔狀まで被下あり難く深く奉感謝候歸國後は常に父の枕邊に侍し佛陀之慈悲を御話し致し居り候處父も非常に喜ばれ入寂前一週間程よりは少しも病苦になやむ事なく誠に安神之狀態に入られ全く木の枯る如くにて家族は勿論親戚三人も皆父の苦しみなきに驚き且つ喜び申候小生も佛陀慈悲之廣大無窮なるに感涙を催し申候此の如く安神之狀態に入らして頂きてより一週日も經過し五月四日午前五時東方の白む頃合掌して遂に寂靜し樂境に入られ申候願願すれば三月十七日皆らずも佛陀之御引接によりて經翳の安神に入らして頂き今又父の入寂によりて益々人生之意義を深く〳〵感ぜさせて頂き唯々如來救濟之宏大なるに感謝致し居り候南無阿彌陀佛

兼て御申つけ之告白文早速御送り申度考に御座候凡夫の悲しさ遂に親子愛情のきずなに縛せられ意憂する今日に至り誠に申譯御座なく候本日御芳翰に接し始めて如來の御啓勵なるを知りいそぎ筆を執り申候廿五日までには乾度御送り申候間左樣御宥恕被下度候就ては書き樣誠に拙く貴重の紙面を汚すは恐れ多き次第なれば何卒御添作之上御掲げ被下度奉願上候本日は求道四號まで御惠送相成あり難く深く奉鳴謝候先は不取敢右御禮旁御詫まで申上度候　草々敬具

五月廿日　　忠作次拜

嘆　詠

讃唱詞

左千夫

奇特なる信心の行者こそありけれ、越中の人、井澤清次郎となむ云へりとぞ、事は求道三の卷四に記されたり、實に信心の行者ほど尊く有難く覺ゆるはなし、即尊き佛緣を讃して、聊か愚な詞章に寄す。

久方の天の佛のみめぐみをたゞ悅べの言の尊さ

み佛の大きめぐみの計らひの内に迷はずあれのみ敎ゐ

人心あやうきものと思ひ知り尊とき御名をせめて申すも

吾こゝろ暗くしあればみ佛の光こほしみ止む時もなし

よき人の心とほれるみ敎に吾世百年樂しきを經め

物思ひの悲しきことをみ佛に聞こえ申して熟寢せるかも

吾が爲す事のことごと何事も大きめぐみに漏れずとを知る

大海の水掬ぶなす報もとみ庭の草を根も措かず扱く

日を一日異思もなくみ庭べに草扱く賤を照らし給へり

青嵐都を立ちてみ佛のめぐみよろこび歸らく吾は

古郷の若葉青葉もいや更に吾に樂しえ慈悲を戀ひつゝ

み佛のめぐみ嬉しく有經れは心常滑さやるものなし

いなゝき

八　風

あぢさなく破られけりな歸り遲き君待つと見しうたゝねの夢

人聲を其れと聞きてや嘶きし今は主なきいましと知らて

首搖げ耳そばだてゝ亡き主をなほ待つらしき眼いぢらし

なき君の形見と殘る稚兒もあらず吾子と愛でましし汝れいつくしむ

去年君が歸へさ降られし遠乘を今日と知れりや春雨のふる

過ぎし日を語るひとりの友とすべくものいひ得ばと汝を思ふかな

あたへたる唯其の草と草の花に春はたけぬと知りしいましか

憂しと思ふ春も一日は乘り出てゝ汝に見せましを男の子なりせば

主もなき汝をしあはれむ夫もなき吾れをあはれと汝は思はずや

Law of Life.

Live I, so live I,
To my Lord heartily,
To my Prince faithfully,
To my Neighbor honestly.
Die I so die I.

暮れ行く日

甲　之

吾身めぐる夕べの空氣
身にふさはず心にも。
雨見ぬ幾日かわきし
岩よ石の亂れ落つ思ひ。
空渡る日片靡く
山に傾ぶく。傾ふく日
かくし眺め幾日來し
思へば心いたきかな。

日落ちて空明かく
山影目に近きかな。
嵐すぎたる靜けさに
物の千よろづ影を消す。
水岩床をさ走る
松鳴るか空行く風
けはひ動き近づく闇
物かげ消えて心醒めぬ。
あゝうまし思ひ心に湧く
流れ大海に
向ふ思ひ胸内に。

目あぐるに並めるもの
けじめ知らず。ただ
青葉のそよぎ。夕闇の
青葉のそよぎ、心動く
われかいのちは物思ふ時。

風止み靜まる空
名殘か過ぎつる風
耳ひゝく。幸あり
任す時天のめぐりに。
目は闇になれ物のありど
見るやらず、さ霧立ち
つばらならねど、立ち出て
吾はも行くに物は止る。

物照らしくまなき
天つ光それもあれ。
われかねかひ、夜の空
黑雲の間よ、一すぢに
吾身の上そゝぐ光。
森の下みち星影あはく
あたり見れば土の上
吾身のかけうすきかな。

ものの音遠ひゞき來

葉も搖らず空立つ木々。
水に落つ何の花
廣ごる輪波音ひゞく輪
夕空のひびき傳ひ
行きつつ心どよむかな。
さやゝ〳〵し水の音
霧のにほひに草生きぬ。

あゝ滿つる月の
光あふれてわく泉。
千花花ごと置く露の
こぼれて石に重ね打つ
水泡しぶきて湧く泉。
草青く布き露をふくみ
千玉もゆらの白き花
莖さへ光る赤き花。

驚く心默しうなだれ
近き見る裳につく花
ふらはふれむ袖つく花。
心そらに花の中
そゞろ行き眼閉づ——
遠鳴りよする波の音
波の穏に浮く五百箇小島
岸打つ波空ひゞき

心のゆらぎ世もゆらぐ。
思は去る、花をわけ
泉の露に足をひづ。
目ばゆし、息の緒の
玉と捨はむざされいし
ふみつ泉に身をそゝぐ。
ありし世遠く吾を去り
新しき國こゝに。
心滿つゝ今しあゝ
心滿つ命死ぬべし。

紹介

◎(西藏古代神話)十萬白龍

寺本婉雅譯

○寺本氏が明治卅七年入藏の途次甘肅安土塔爾寺阿嘉府に於て西藏語より譯遂せられたものである。其内容は喇嘛教の先驅たる西藏古代の宗教ボンポ教の經典である。譯者の語る處によるに喇嘛教は單に其開祖パトマ、サンブハーバ師によつて開始せられしにあらずして既に其以前に於て印度佛教殊に大乘教がヒマラヤ山を越えて西藏に入り西藏民間宗教思想に投じて組織せられたる古代ボンポ教に其が起源を有し喇嘛教の起源及び教理儀式行事と相關連すとの事である。全体喇嘛教は密教と淨土教とを合せたるが如きものにして、殊に其信念の堅固なる點に就きては頗る研究を價するものである。而してボンポ教は其先驅なりとすれば頗る注意すべき書と言はねばならぬ。されど一瞥するに五蘊、六根、六境、六識、六觸受、六生處等の法數若くば龍の名、佛德等の名詞を以て充されてある。實朴なものである。譯者は其後入藏猶ほ再び環古地方に向はれし事なれば今後引き續きて喇嘛教を我國に紹介し、世界の秘藏を開かれん事を希望する次第である。(定價壹圓弐拾錢、發行所帝國出版協會)

◎眞宗假名聖教

京都　法藏館出版

近來信仰の機運が隆になるにつけて聖典の出版が頻に行はるゝやうになつたは頗る賀すべき事である。本書は從來和本にすれば拾三册の大部たりしを体裁よき洋裝小册子に造り上げ金絲にして柔皮卷にしたれば携帶に至極便利である。卷末に大須賀秀導師の親切なる各書の解題と頗る便利なる索引とを附錄とせられたるは大に謝すべき事である。(定價上製壹圓特製壹圓五拾錢)

◎眞宗寶典

同　上

本書は南條井上兩博士の監修の下に無城賢順師の編輯せられたるものである。体裁は前書同樣の柔皮卷金絲の裝丁で内容は眞宗漢和の聖教の中より要文を摘錄し求道家の爲めに罪惡觀、無常觀を初めとして信念の實感、難信の理由、念佛の意相、處世の用心等に關する切切なる聖訓を列擧したものである。(定價上製八拾錢、特製壹圓參拾錢)

◎親鸞聖人全集上下二卷

文明堂、文榮閣發兌

本書は南條前田村上三博士監修の下に百目木智蓮氏の編輯せられたるものである。表裝体裁凡て瀟洒たる美本にして上卷には内づ教行信證を延書にて載せ略文類愚禿鈔二門偈を收め、下卷には和讃三經文類、銘文、一多證文、唯信鈔文意、末燈鈔、御消息集、往還廻向文類を收め歎異鈔、口傳鈔、改邪鈔、執持鈔、辭山御書、御傳鈔も入れてある。殊に左訓異本等をも校合して頗る親切に出來て居る。卷末に附錄として各書の解題あれば頗る便利なり。(定價各壹圓)

◎眞宗聖訓

森江書店

本書は南條博士、大橋徹映師の協著である。体裁は亦瀟洒たる美本にして内容は七祖、宗祖、を始として假名聖教及其他の眞宗の聖教より要文を摘錄したものである。篇を分つて終養、人生、修道、信仰、念佛、佛陀、教理、報恩の八つに分類し、各篇又數章に分つてある。附錄には列祖の小傳を掲げ各其著書に就て叮嚀に解題を施し、餘程編輯が善く出來てある。(定價八十錢)

◎新約物語

中村春雨著

本書は新約全書の四福音書及使徒行傳、約翰默示錄等を言文一致風に書き延べたものである。凡の材料を一貫してよく集めてある事と事實の解かりよくなつてある事は善いが、文章が俗氣を帶びて信仰の書としては莊嚴を欠いて居る。されど古代の名畫を挿繪として湯山に入れてあるは眞に無等の福音である。(發行所定價壹圓、京橋文淵堂)

◎神

齋木仙醉評釋

スピノザの哲學を至極簡潔に書き表はしたる寸珍の書物である。序論八項本論三十二項に分ち、深遠なる哲學を最も平易に說明したる點は著書の長所である。殊に著者はスピノザの汎神論に私淑する處深しと見えて一應の解說でなくして其理想海に醉へる趣がある。又莊子と比較して縱横に論じてある。冠頭スピノザの肖像を掲げ、讃じて「アムステルダムの樓にて、眼鏡を磨ぎて煙立て、孤獨の生を送りたる、秀才の昔憶ふ哉」とある。吾人嘗て其地を過り遺蹟を訪ひしに市場

の前の小さなる家にして今は古金物屋となり此の偉人の跡を弔ふに由なかりしを歎ぎし昔を回想した。

◎三の王冠
◎金髪王女

嚴谷小波編

前者は世界お伽噺の八十四編、後者は其八十編である。前者は愛蘭土お伽噺集より取つたもので、後者は佛蘭西のお伽噺より選んだとの事である。お伽噺を以て夙に少年少女の間に歡迎せられた小波氏が、此の世界お伽噺に初めて筆を起されたのは數年以前の事である。其の間一日の如く力を其編纂に盡されて全部百篇の完成も近い事であらう。世界お伽噺は「少年日露戰史」と共に毎篇寄贈を忝したにも拘らず、其都度之を紹介するの機會を得なかつた事を謝する（定價各冊入錢發行所日本橋博文館）

◎理想的商業

高島圓著

高島氏の自己が經驗より得たる實際的智識より理想的の商業を縱横無盡に論述せられたものである。賣と買とは對等也、商業を商賣にする勿れ、定價を定價たらしめよ、釣錢に關する德義覺る人たらんよりは作る人たれ、等奇警たる題目の下に讀者をして卷を捨て難からしむるは著者獨特の筆致である。依裁も頗の氣の利いた作である。（定價貳拾錢、發行所日本橋文錦堂）

◎宇宙の默示

理學士 石川成章著

著者は吾人が人類たるの實を擧るに最も緊要にして適切なる方法は吾人の常に須臾も離るゝ事の出來ぬ自然界を觀察して其の天啓を吾人身心に感受体得するにありといふ持論を有し、宗教も倫理も哲學も科學も總て此の宇宙の默示を人が叙述したものに過ぎ無いといふ見地よりして書いたものである。殊に材料を氏が專門に研究せられたる緻密なる科學的研究に取り、氏が信仰たる無量壽無量光を說明せんと企てたものである。自然觀察によりて求道心を起し信仰を求むるに至る事、亦水火の妙容を說いて遂に精神上の貪欲瞋恚に及ぼし、最後に佛陀の力に及び、或は光線を說きて終に佛の光明に及び、生命を說くに及んでは動植物は生命より地球の生命吾人の生命より遂に死の關門を過ぎて永久の生命に及んである。能くも自然界と精神界の間に巧にアレゴリーを求めたものである。文章頗る流暢にして自然に引き込まるゝ氏の快辯が遺憾なく顯はれてある（定價七十錢、京橋井冽堂）

◎感化術

伊東思恭著

著者は嘗て歐米不良少年感化法を出版して歐米感化院の外形を示されたが、今又本書を顧はして其內容を盡したものである。章を分つ事も、感化機關の必要、感化院建築法、を始めとして職員教訓法及び其施行等を記載してある。現今社會事業の起るべき時に當つて適當なる參考書である。（定價二十三錢、寫掛所四谷東京書院）

◎南北對照英漢和譯法句經

文學士 常盤大定選

本書は諸經律に散在せる佛陀の金言を集めたるもので、西洋に於てはハウスベル氏パーソー語より一度び之を羅甸語に譯してより大に人の耳目を驚かし佛陀の教訓が如何に人生に適切なるかを覺らしめた書物である。其後續々之を紹介する者出て來りて英獨佛諸國の語に翻譯せらるゝのみならず、或は西藏語より譯出し、或は漢譯を英譯し、非常に行はれたるものである。斯の如く西洋に於ては著明たりしに係はらず日本に於ては未だ其全文を翻譯するもの無かつたは頗る殘念の事であつた。唯加藤正瑯氏の抄譯が行はれて居つたのみである。現に南條師も序文を書きて本書は先師マクスミューラー翁が英譯せられ、故友笠原研壽師が愛讀せられたる書物であつたが今日迄其全体を世に紹介する事出來なんだは遺憾であつたと言はれてある。然るに今度常盤學士はエドモンド及びマクスミーラーの英譯を以て基礎とし其上方に師が獨特の筆を以て韻文に和譯し、又下方には從來漢譯せられたる法句經、法句譬喻經、出曜經、法集要頌經、の文を出し南北兩傳を對照したる英漢和三譯の法句經を完成せられたのである。品數二十八、一品毎に詳に其品の大意を述べて佛の說法せられたる場合を示されたるは慨に結構である。其一例は昨年の本誌第六號雜錄欄に掲載せる如くである。加之著者は後序を加へて審に此經の歷史に就きて紹介せられてある。蓋し從來佛教を研究するものは悉く教理的に聽するが爲めに宗教として其信仰を味ふ爲に適切なる書籍の少きのは頗る憾とする處であつた。然るに本書は全く信仰修養の聖典として原始佛教の眞面目を遺憾なく盡したる者なれば、是非一讀を要する經である。（定價四拾錢、發行所博文館）

時報

求道學舍紀念日

六月一日は求道學舍を開ける紀念日にして本年は正に其第四回に當れも、例年の如く島田蕃根翁と荻野仲三郎氏臨まる、島田翁は現時の求道學舍及び會館設立地の家屋を所有せられしが、因緣ありて遂に之を買受くるに至りし也、しかるに翁は嘗て家屋に於て佛教を講せんとの志ありしが遂に之を果さゞりしに偶然にも此所に學舍を設け又會館を設立せんとするは不可思議の宿緣といふべし、午後三時兩氏と共に學舍二十二人中庭に於て撮影し、引續きて一同佛間に參集して恭しく歎異鈔を輪次拜讀して、感謝の至誠を捧げ、近角は談話して曰く、

御互に御緣ありて偶然にも斯の如く生活を共にするも全く佛陀の御惠み也、年々歲々過き去りて學舍開けてより四年とはなりぬ、其間我親も失ひぬ、子も失ひぬ、既に諸君は學舍を出て諸方を仕事したまふも多し、唯此間に於て人生頼みとすべきは信仰の一つなり、信仰なくんば幾年生活を共にするも何等の意義もなし、既に歎異鈔の結文にも一室の行者の中に信心異ることなからんためになく〳〵筆を染めて之をしるす、といへるにあらずや、人生如何なる社會に立つも其中心を形作るは信仰の外に求むべからず、而して其信仰たるや唯佛の御力其れ自身の外なき也、唯御互に此佛陀を信じ佛陀を念じつゝ佛陀の御力の不可思議なることを鐵低し感謝し奉るばかり也云々

式終りて一同食卓につきて本年帝國大學卒業の鈴木卓苗及び高等商業學校卒業の長沼龜三兩君の祝賀を兼ねて晩餐を共にせり、

島田蕃根翁延壽會

明治思想界の恩人島田蕃根翁今年正に八十の高齡に達せられしを以て其延壽會を催されたり、翁は舊德山藩の碩儒にして大參事として藩政に參し、明治維新後教部省の設立せらるゝや之に出仕し、後、野に下りて縮刷大藏經を創志し、熱心なる盡力によりて終に大成されたり、蓋し是れ翁か天道溯源の小冊を一見して之を思ひ立ちたりしに基くといふ、浩瀚なる藏經が容易に讀書室に備へつけられて、閲讀の便を得る全く翁の賜也といふべし、又藏經書院の大藏經も續藏經も翁の提撕に待つもの頗る多しといふ、又翁は聖德太子を尊信すること深くして太子の御製三經註疏を世に紹介し既に維摩、勝鬘の二經の註疏は立派なる木板を以て刊行されたり、又梵網戒經の上卷の如きも翁の手によりて初めて世に知られたり、斯の如く書物を世に紹介せしのみならず、其內容につきても博覽强記學界の指鍼として一世の仰ぐ所也、其一端は南村閑話として嘗て本誌の讀者に紹介せし所殊に志操堅實にして權門に出入することなく、一世淸貧に安んじて世に售れらるゝことを好まず、殊に吾人は翁に心服して措かざる所は翁が信念頗る强固にして少しも世に阿らず、終始一貫敬虔なる信仰を有するにあり、今回知人故舊門人後進等相謀りて六月九日をト

して芝青松寺に於て延壽會を開けり、來會者の主なる者は兒玉源太郎、寺内正毅、杉孫七郎、南條文雄、村上專精、前田慧雲、島地默雷、朝吹英二、大内青巒、井上圓了、國分青厓、日下部鳴鶴等を初めとして無慮二百餘名、先づ席定まりて翁は其夫人と共に一族兒孫を帥ゐて出席し世話人惣代來馬琢道氏の挨拶あり次に發起人惣代として大内青巒居士の翁の祖先已來名僧高僧の多かりし事及び翁の性行逸事につき談話し、岡田治衛武氏來會者を代表して翁が年來の素志に基き木綿紋服各一着宛を翁及び夫人に贈り、兒玉大將は鄉里德山に於て親の代よりの門人として翁に代りて謝辭を陳べ、一同紀念の撮影をなし、法隆寺瓦形の菓子を頒ち、書畫會を開き講談手品の餘興ありて散會せり、而して當日來會者は勿論翁を知ると知らざるとに論なく翁が思想界佛敎界に對する高恩に酬ゆるために養老金を募集して贈呈する計畫にて當日だけにても既に數百圓に上りたり、猶有志諸君にして志を同ふせらるゝの諸君は協贊あらむことを請ふ。

夏期講習會

夏季修養の季節とはなりぬ、近角は七月一日より十日間讃岐高松佛敎研究會の講習會に出席し、九龜にて三日間講話をなし一旦東京に歸りて大日本佛敎青年會の講習會に出席し、八月中旬より例年の如く信州飯山の講習會に出席し、又越中放生津の講習會に赴く筈也。

▲求道學舍日曜講話

罪惡觀の心相（四月二十九日）
破闇滿願（五月十二日）
佛陀の光耀（五月十五日）
威神力（五月二十六日）
不簡善愚（六月三日）
名號の父光明の母（六月十日）
歸命の意義（六月十七日）

▲第二求道會講話

人生の祕奥（五月四日）
無我の力（五月十一日）
無碍の德（五月十八日）
降魔の力（五月二十五日）
瓦礫金と變ず（六月十六日）

▲第三求道會講話（六月二日）

正直の心

求道會館設立喜捨金受領報告（第十五回）

一金貳百圓也　四恩瓜生會殿
一金拾圓也　花卷　宮澤善治殿
一金拾圓也　花卷　宮澤直治殿
一金五圓也　花卷　宮澤政次郎殿
一金貳圓也　東京　樋口龍緣殿
一金五拾錢也　東京　渡邊知空殿
一金五拾錢也　東京　並山拜石殿
一金壹圓也　東京　吉原光一殿
一金壹圓也　福島　七島やす子殿
一金壹圓也　長崎　正木照子殿

小計金貳百參拾壹圓也

通計金貳百八拾貳圓三十八錢也

右御寄附を辱うし難有奉存候茲に謹んで奉感謝候也

●島田蕃根翁延壽祝賀●

明治思想界の恩人島田蕃根翁今年八十の高齡を迎へられ候に付知人故舊門人茲に相謀りて延壽會を催して其高恩に酬ゐ候次第に候此際若し志を同うして翁に寄贈せられんと欲するの諸君の便宜を謀り本社に於て送金取次き可申候間御承知被下度候

頓首

求道發行所

大日本佛敎青年會第十五回夏期講習會

講師

ドクトル　本多日生　文學士　近角常觀
ドクトル　荻原雲來　ドクトル　渡邊海旭（依賴中）
文學博士　加藤咄堂　文學博士　南條文雄
文學博士　村上專精　文學博士　大宮孝潤
前田慧雲　松本文三郎
齋藤唯信　境野哲
日置嘿仙（依賴中）

六月　大日本佛敎青年會

一會期　七月十二日ヨリ廿一日マデ
一會刻　午前八時ヨリ十一時マデ
一會場　芝愛宕山下青松寺ニテ
一聽講券　金五拾錢
一申込　小石川區大塚坂下町十八番地本會事務所（はがき又ハ手紙ニテ）。或ハ本會聯絡學校内委員マデ

南條博士序
常盤學士撰

南北對照
和英漢譯

法句經

大判、約三百頁、紙質精良、印刷鮮明、頗る美本
定價金四十錢郵税金八錢、博文館發行

法句經が、泰西諸邦に喧傳せらるゝや、久しく、之が譯述、實に十餘種の多きに上れるは、簡潔の語句の中に、根本佛敎の大綱を該羅し、這裡に佛敎道義の要領を包含すればなり。而して、之が北傳漢譯も亦四種の多きに上るを見れば、以て其愛翫せられし程度を卜すべし。今篤學なる常盤學士の周到なる注意によりて、馬翁の英譯を通し、南北兩傳を對照して餘蘊なきのみならず、且つ流麗なる和譯を加へ、國字を附しに、何人にも解し易からしむ。一たび之を繙けば、佛敎本來の面目、紙表に躍り、恰も釋尊金口の說法に接するの思あり。猶後序に於て、南北兩傳の同異を比較對照して綿密を極め、三藏中に於ける此經の位置を調査して丁寧を盡せるが如きは、斯道に志あるものゝ好羅針盤たるべし。眞に近來の珍著なり。

取次所　本郷區森川町一　求道發行所
同　小石川區白山前町三十一　無我山房

文學博士　南條文雄先生
文學博士　前田慧雲先生
文學博士　村上專精先生　監修

親鸞聖人全集

◉上下二冊◉價貳圓◉郵税二十錢

目次

◎教行信證六卷
◎愚禿鈔二卷
◎淨土和讚一卷
◎正像末和讚一卷
◎尊號眞像銘文一卷
◎末燈鈔一卷
◎御消息集一卷
◎歎異鈔一卷
◎改邪鈔一卷
◎御傳鈔二卷
◎淨土文類聚鈔一卷
◎入出二門偈一卷
◎高僧和讚一卷
◎三經往生文類一卷
◎唯信鈔文意一卷
◎一念多念證文一卷
◎往還廻回文類一卷
◎口傳鈔一卷
◎執持鈔一卷
◎辭山御書一卷

本集は已上の遺文を集輯大成し南條博士。村上博士。前田博士等の監修の下に嚴正なる校訂を加へ、其漢文を以て記述せる分は、大抵和譯を用ゐて日夕拜誦の便を圖れり。其紙質印刷は特に精選し、製本は壯嚴美麗にして且つ堅牢無比携帶に便利にして決して眞宗聖典の名に背かさむことを誓ふ。苟も眞宗の流を汲み、聖人の人格に接せむとするものは、是非とも座右に備へられむことを望む。

發兌元　東京市本郷區四丁目五番地　文明堂
發兌元　東京市京橋區中橋廣小路六番地　前川文榮閣

眞宗聖訓

文學博士　南條文雄師
大橋徹映師　協纂

梵文大無量壽經を初めとして眞宗の聖典百餘部の內より現代に適切なる聖訓を網羅列擧したるものにして篇章條項の秩序整然一目の下に亦眞宗の要義精髓を知悉する事を得るの好編述なり蓋し吾人の修養、修道に對切なる金科玉條の聖訓及ひ他力信仰の極致を別露したまへる聖言收めて此の一卷にあり篇を分つこと入修養篇人生篇、修道篇、信仰篇、念佛篇、佛陀篇、敎理篇、報恩篇の下に章を分つ四十餘綱羅せる聖訓金言七百條更に列祖小傳並に著書解題を附して本書の完璧を期したる者道を修むる人他力安慰の信仰を求むる人の好大導師世界の寶典たり若し夫各宗の布敎者之を照用せらるれば新資料は縱橫自在忽ちにして涌くが如し實に最至便至要の金言辭彙たる事敢て信じて疑はざる所乞ふ諸氏よ日夕坐右に備へ以て精讀玩味せられん事を

一、携帶至便金字入優美　五百頁餘　全一冊
二、用紙舶來下質、寸方竪五寸　横三寸五分
三、定價　金八十錢　郵税金八錢
四、豫約特減　金六十錢郵税金八錢
五、豫約特減は前金に限り申込期限は本年五月二十日限り
六、期限後は定價に復す製本出來期日は五月三十日申込順に依り發送す

發行所　東京市京橋區新橋倉町五丁目九二七　電話　森江本店

新刊及ひ重刊

清澤滿之先生遺著（價卅錢　税四錢）

佛敎講話

新版

故、清澤先生が諸々に於て試みられたる講話を集めたるものにして、精神講話の續編とも見るべき書なり、精神講話によりて多大の指導を得たる求道者は亦、本書に依つて得る處尠からざるべきか

◎精神講話　七版　價卅四錢　税四錢
◎精神主義　四版　價卅錢　税四錢
◎靈的生活　二版　價卅錢　税四錢
佐々木月樵氏著
◎實驗之宗敎　五版　價五十五錢　税五錢

右品切の處何れも重刊せり

舟橋水哉氏著（價五十五錢　郵税八錢）

原史敎原佛

新刊

小乘佛敎史論の著者舟橋水哉氏が多年苦心の作、佛敎研究者の是非一讀を要すべき書なり。

發兌元　東京市本郷區四丁目四番地　文明堂

近角常觀先生著（久しく品切の處第四版出來す）

信仰問題

菊版二百頁以上
代價一册五拾五錢
郵稅拾錢

如何にして信仰を得可きかとは、現時青年の叫にして、如何なる信仰を以て社會を經營すべきかとは二十世紀の問題也、本書內篇は前の疑問に答へたるものにして、外篇は後の疑問に答へたるもの也

內篇には內的實驗の主義に立ちて現時紛糾亂雜せる哲學、倫理等の關係に向て直截簡潔なる判斷を下し、宗教の眞髓を攫み來りて切實なる求道者に與へむとする者、其信仰の極所を叙するに至りて、慈光春風の世界に遊びて攝取の淸懷に悟融するの想あらしむ。

外篇は社會の病源に向て根本的の救濟を施こし、理想の淨國を現世に實現せんとする者、歐米各國の宗教界及ひ社會事業を紹介し、飜て佛教原初の眞精神を說き、將來、淸新にして且つ健全なる社會的經營を皷舞し來る、繙く者をして感激奮起せしむるものあり。

本書卷首に米國シカゴ青年會館、英國兩院及ウエストミンスター寺院、獨逸ルーテルの聖會飜譯室、佛國宗教歷史大會の寫眞石版圖を揭け、附錄として著者洋行中の通信及ひ旅行記を收む、趣味津々聊か諸者を慰むるに足らむか。

發行所　東京本郷四丁目　文明堂

近角常觀著

信仰之餘瀝　第七版

定價　上製二十錢　並製十五錢　郵稅貳錢

發行所　東京市本郷區四丁目五番地　文明堂
賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

常盤大定著

佛陀之聖訓　再版

定價　上製卅五錢　並製廿三錢　郵稅四錢

發行所　東京市小石川區白山前町卅一番地　無我山房
賣捌所　東京市本郷區森川町一番地　求道發行所

明治三十九年五月廿七日印刷
明治三十九年六月一日發行

發行兼編輯人　近角常觀
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所　求道發行所
東京市神田區神保町
大賣捌所　東京堂
同　本郷四丁目　文明堂

規定

一、本誌は毎月一回（一日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
　但郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

求道第三卷第五號　明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可　明治三十九年六月一日發行（毎月一回一日發行）

前號要目

求道
◎自覺の問題
◎罪の自覺
◎救の自覺

感謝
◎落花無常◎庭前の雜草◎四海兄弟◎人道、佛道◎眞正の慈愛　左千夫

講話
◎大覺　近角　常觀

聖傳
◎ジヤータカ釋尊傳——修行

告白
◎獲信　石津　靜衛

研究
◎親鸞聖人著書の特色　近角　常觀

講義
◎歎異鈔——第一章　近角　常觀

嘆咏
◎春の一日《長詩》　左千夫
◎思を述ぶ《長詩》　甲之
◎行く春《短歌》　八風

紹介
◎國運と信仰◎靈魂論

時報
◎降誕會◎求道學舍近況◎求道會講話題